

文學博士 三宅雄次郎 君序  
 大僧正 本多日生 師著

(急讀)

洋裝全二冊貳千頁  
 正價金四圓  
 特價金參圓  
 內地郵税金貳拾錢  
 臺灣韓八百及迄の小包料

# 法華經講義

## 目次

◎序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀  
 ◎第一節三種教相の綱格 ◎第二節十雙權實の巧釋 ◎第三節六重本述の法華經觀 ◎第四節三法々轉の  
 解釋 ◎第五節待絶二妙の解釋 ◎第六節一念三千の妙觀 ◎第五節日蓮の法華經觀 ◎第一節本化別頭  
 の教相 ◎第六節但令用實の活斷 ◎第七節應身常住の妙義 ◎第八節佛界緣起の妙旨 ◎第五節究竟  
 圓善の活釋 ◎第六節聲色爲經の眞義 ◎第七節十一節身讀法華の光顯 ◎第八節信念成佛の要道 ◎第九節  
 兩善一貫の活論 ◎第十節當教相の異目 ◎第十一節身讀法華の壯觀 ◎第六節天台講經安義 ◎第一節  
 四教五時の統釋 ◎重玄義の妙解 ◎第一節日蓮上人の學風 ◎第二節本化獨特の五支 ◎第五節文々四釋廣  
 釋の概略 ◎科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ◎通解 ◎妙解 ◎異解 ◎批判 ◎質議 ◎解決 ◎字義 ◎  
 ◎釋文 ◎讀唱 參考 ◎讚唱

發行所

東京淺草北清島町  
 振替東京一三一九

統一團

一

團

## 宗教と時代の趨勢 國民思想の統一

法學博士 阪谷芳郎  
 大僧正 本多日生

囚はれたる生活  
 は人間の恥辱也

三上義徹

日蓮主義本尊論

井村日咸

罪囚者改善政策

秋葉日虔

蘭室訪問の記△活動教報

白碧生

法學博士 添田壽一

號五十二百二第

# 統一

佛教各宗派管長招待會に於ける見聞記  
 宗教家の活動を促す

# 縮妙法華經並開結

第一卷種 紙裝 正價金貳拾錢 郵稅金四錢  
 第二種 布裝 天 金 正價金四拾九錢 郵稅金六錢  
 第三種 皮裝 三方金 正價金八拾錢 郵稅金六錢

法華經は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸、思想統一の最高指針なり、現代思想界の紛亂其極に達し、結歸する處を知らざるに當りては、須らく法華經の研鑽を獎勵せざるべからず、然るに世流布の經典其類多しと雖ども、或は其價貴く、或は携帯に不便に、或は文字細微に過ぐる等、求道の士をして満足せしむるものなし、仍つて本會は此等の不利不便を除き、菊半裁判として携帯を便にし且其價を廉にし以て汎く一般に供給し本經の普及を圖らんとし茲に之を出版す、希くは諸士本會の趣旨を贊助せられ本書の普及に御助力あらんことを

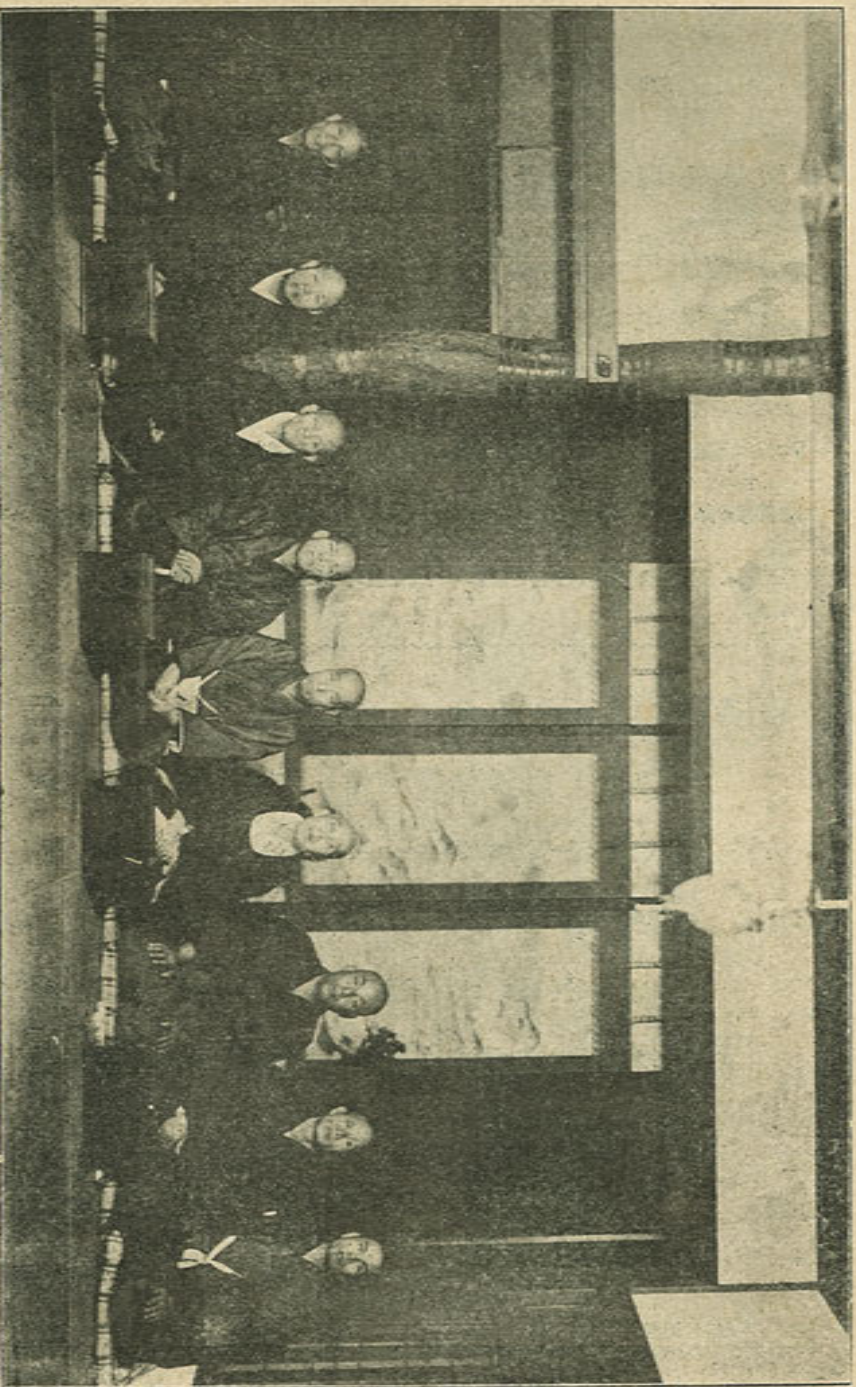
發行者 法華經普及會

發行所 統一團

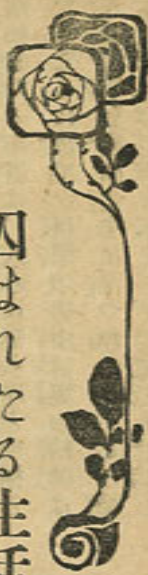
東京市淺草區北清島町統一團内

東京市淺草區北清島町十四番地

振替口座東京一二一九番



主 張



### 囚はれたる生活は人間の恥辱也

凡人は名利に囚はれ權勢に走る、稍や少しく智解あるものは學見に囚はれて大家を氣取る、一たび囚はれたる者は容易に脱け出づることは出来ない、人は冷かなる理性の判断を藉りて囚はれまいと云ふ、されども斯く囚はれまいと云ふ人が多く囚はれる、現に滔々たる天下一流の所謂先覺者もみなその所見に囚はれて居る、人は時代の流行言葉に囚はれてはならぬと言つても、思想問題を語るものは西洋哲學者の新熟語に囚はれて居る、新しい言葉を使へば新智識を貯へて居る様に見へるので得意になる、それが氣持がよいのであるかも知れぬ、けれども新しい熟語はいくらでも出て来るので亦直ぐに舊くなる、多くは囚はれないと感張りて居るが非常に囚はれる、生の要求とか生存の自

覺とか云ふと何だか其意味が發揮したやうに感ずる、物質的靈的と云ふ言葉を使ふと氣持がよい、また或ものは現代を超越せねばならぬと叫んで居るが、如何なる意義であるか分つて居るのであらうか、今日之を叫んで五年十年の後に於て、果して自分の現在が現代を超越することが出来ようか、自分では大に超越せんと試みるであらうが、社會の生活状態は複雑を極めて單純ではない、思想家が駆け廻り廻りて國家民生の爲に働いて居るが、其立場は寂れて訪ね来る人もない少しく資本あるものは道德の權威を蹂躪しつゝ自働車を乗り廻はして居る、一方は生活欲の上に我儘を行つて居るが、一方は熱心能く道の爲に働いても現在には生活難がある、生活難は獨り下層勞働者のみでない、

### 訓 聖

日蓮が人類は異体同心なれば、人々少なく候へども大事を成じて一定法華經弘まりなんと覺えて候處は多けれども一善に勝つ事なし

【日蓮各教團の代表者、十一月四日午後六時、土野公園常盤綠地に於て懇親の宴を開く、互に關係を整理して道の爲に攜手して進歩すべきを約しぬ、各教團聯合の新機運は來れり、異体同心の聖訓を身體するの時は到れり、道の爲めに歡喜涙を堪ふべしや、】

部 師 徹	義 辨	上 保	三 神	幹 務 總 監	日 蓮 宗 々
師 生	日 口	多 多	本 本	管 長	顯 本 法 華 宗
師 慈	日 口	泉 泉	小 小	管 長	日 蓮 宗
師 正	日 部	部 部	何 何	管 長	日 蓮 正 宗
師 主	日 口	野 野	野 野	務 總 監	顯 本 法 華 宗 々
師 威	日 川	長 谷	長 谷	代 代	本 妙 法 華 宗
師 秀	日 房	花 房	花 房	代 代	不 受 不 施 派
師 遠	喜 本	喜 本	喜 本	代 代	本 門 法 華 宗

向て左側ヨリ

餘裕のある穩かな生活と云ふものは全く地を拂ふて激しい生存競争は行はれ、其結果は生活の困難を惹起したのみならず、他面にはこの刺戟が多様多様に爲つて心的生活の上にも變調を見るに至つたのである、されば人はみな理想に生活するの餘裕が無くなつて、飽くまでも現實主義實用主義に傾いて來た、眼は物質の文明に眩まされて、眼の前に欲望を刺戟すべきものを見せつけられて居るが、之を我物とするのは容易の業でない、奢侈の材料は益々備はるゝ同時に、之を享樂することは愈々困難となつた、饑えたるものが美味美食を眼前に眺めながら之を食ふことの出來ない今の人は絶望と煩悶とに苦んで痛切なる悲調を帯びて居る、人智は進んで新文明は建設せられたに相違ないが、物質上の要求を充たし能はざるのみでなく、宗教及び道德上の權威を蔑如したる事實は、人心に無秩序と動搖とを來さしめた、こゝに於てか科學の自由討究の精神はいつしか各人の自覺を喚び起すに至つたので、この繁忙なる刺戟多き生活状態の中に、自己先天の内容を

發揮せんとする、精神の慰安と満足との要求は、牢として人心の胸奥に植えられた欲求である、而して一面には生活欲の力が其自覺を壓へようとする、他面には新たに生じた自覺が飽くまで之に反抗して脱け出てようとする、各其心の内面に於て、互に反目嫉視して傷ましい惡戰苦闘を續けねばならぬように爲つた、即ち物質生活の繁忙のみでない、精神的生活に於ても、時々刻々限りなき刺戟の爲に騒がさるゝ状態に陥つて居る、思想の海の波動は、絶間なく吾人の心に浸漸して動搖を感ぜしむる、斯の如く吾人の心の中には人文戦争が行はれて居る、觀よ、唯物論の機械觀は自由意志を否定して心靈を無視し、神を人間に引き卸して宿命論を立てる、然かも主觀主義は情生命の絶對價值を認めて之に反對する、自然主義は現實即ち眞なりとして科學の求める眞理であると唱へる、這般の矛盾した諸種の思想が、現代人の思想の中に一時に輻輳し來つて互に咬み合つて相争ひ、さらに實生活の方面に於てはあくまでも個人の自由と自我の擴張とを要求し、し

かも自由の要求は他の自由を浸蝕して不調和が起る、盲目なる利己の生存欲のみを知つて、道德的理想も利他的行爲も、自我の物質上の満足に充たすに過ぎざるものと安んじ、科學の嵐に宗教的色彩を吹き散らして一場の夢たらしめ、樂園の憧憬は消え失せて修羅の巷と化し、斯くして自己の心の渴仰の中心を失ひ、信仰の光りは消え理想の希望は失せ、宗教的思想をその足下に蹂躪して勝利を得たと思つて居る、けれども徒らに激烈なる生存欲に疲るゝのみにして、信仰の生命より離れ去りてどこに人生生活の價直があるであらうか單なる盲動育闘によりて自己の精力を徒消するは極めて惜むべきことである、吾等は靈的生命の存在を認證して人生に深き基礎を築き上げ、その努力を以て因はれたる物的生活の束縛より脱し、それ以上に人格の全体を進化し得べきである、然らずんば即ち自己の生活に對して誠實を缺くものであつて、また他に對しても不誠實たるを免れぬ、自己に誠實なるは自己の責任を自覺する態度である、而して自己の責任を自覺する事

は、やがて一切を尊敬し一切を愛する事になる、何となれば、他を尊敬するとは他の内在向上性を認めて菩薩的行動を理解するのであるからそこに靈肉調和せる全生活の向上を促がすことに爲る、この根本自覺が人生理解の要件で、法華經の中にはかゝる思想を發揮されて居る、

我深敬汝等一不取輕慢一所以者何汝等皆行菩薩道一斯の如く人生尊重の生活より、さらに確實なる信仰的靈力をにぎらば、いかに外部の壓迫があらうとも苦悶も恐怖も起るものでない、何とすれば煩悶とは自己以外から來るものでない、即ち自我の統一が打破されたる分裂に伴ふ不安の状態を云ふので、從て全自我の努力し得る所には、恐怖も煩悶も不安もあるべき苦でない、而して全自我の努力は、因習的妥協的の生活より脱け出て、創造本位の生活に這入る、是れ正しく無限向上の道を進むもの、斯くして不斷に全自我の發展に努めなければならぬ、碌々として因はれたる生活は、人間の恥辱である事を自覺するを要する

# 國民思想の統一

大僧正 本 多 日 生

國民思想の統一と云ふことは、國民全体に亘ることであるから、個人個人が精神の修養と云ふ問題については、直接に關係を有たないものであると云ふ風に考へる人もありませうが、個人と全体と云ふ關係は少しも離るゝことの出来ないものであつて、個人々々の思想と申しても必ず國家なり社會なりの全体の風潮に影響せらるゝものであつて、非常な人間ならば格別であるが、千人が千人其時代なり其社會なりの風潮から全然無關係にして自己の思想を保つて行くと云ふことは出来るものでないから、全體の國民の思想を健全にすると云ふ大きな方針が定まつて、それが一人一人の精神修養に當嵌つて行かなければならぬので、個人主義と云ふ方から云へば、自分一人が勝手に極め込んだ思

想を以て精神の修養が出来ると譯してある、けれども個人特長と云ふものは全體と一致して始めて完成せらるゝものである、語を換へて言へば國家の風教の中に個人の品性も陶冶せられて行くものである、若し我國が政治上に於て國家の統一を理想し軍備上に於て國家の統一を理想し、有らぬ方面に於て國家の統一を理想して居るものであるならば、無論此風教問題と國民思想の統一と云ふことも國家の上に於て深く心を注がなければならぬものであつて、國民の側から云へば國家を思ふの精神は、軍備の充實を計る上にも、經濟の發達を計る上にも、忠愛の觀念は注がれやうが、それと同じ時に若くはそれ以上に此思想の健全統一と云ふことは其忠愛の觀念から見ても考へなければならぬものである

全體の爲めにも自己の爲めにも考へなければならぬ問題であつて、今日の我國の有様について見ると國民思想の統一と云ふことはさう大事なことでない、それは教育家とか宗教家とか云ふものが左様なことを云ふのであつて、政治家とか或は國家の經綸を念として居る者の上に於てはさう云ふ事は緊要のことでないといふ風に思はれて居るのである、さう思つて居ないと云ふ人もあらうけれども事實は確かに思想の問題が輕んぜられて居るのであります、それは色々の事柄に依つて證明することが出来るのでありますから、今日に於て國の發達を思ふ側から見ても、此思想の統一と云ふことは大事の問題であります、無論統一と云ふことについては個人個人の特色を抑へるのではない、又夫れ個人の職分の本領を壞はすのではありませぬ、個人の特色なり其職分の本領なりは益々發揮して其全體の上に調和統一を取るものであつて、個人の特色が顯はれることに於て文明の光は燦爛たる光輝を放つのであるし思想の自由と云ふことは殆ど文明國の通義となつて居る

のでありますから、此思想の自由を拘束するとか個性の特色を打ち壞はすと云ふやうな意味に於て思想の統一と云ふことを論ずるのではありませぬ、或學者が思想の統一と云ふやうのことは出来るものではない、それは愚な考へであると云ふやうなことを往々筆にするのを見受けますが、それは思想の統一と云ふことを、思想を拘束して貧弱なる或一の型の中に嵌め込んで仕舞ふと云ふ風にのみ考へて居るから、統一と云ふことに反對するのでありますけれども、それは誤解である元來統一と云ふことは總ての方面の必要を有つて居るものであつて、此國家の組織體制の上について考へるものならば、國家の統一と云ふ事が鞏固に行はれて居る程其國は健全なる發達をするものである、又道德の方面から考へて見ましても其道德の主義なり規範なりが、ちやんと統一せられて居る國家は健全なる品性を保つて行く人が多くなつて行くのであります、又美術などの方面で申しますれば繪畫彫刻と云ふやうなものは色々の事柄をそこに集めて調和を取つて、一の畫なら

畫の統一と云ふことがなければ、どれ程部分／＼に美しく顯れて居つても、全體として統一がなかつたならば其價值がないものである、人間の思想も亦其通りであつて、様様の事を知つて居つても、色々の技能があつても、其思想に於て鞏固な統一と云ふ事を失つたならば、其人格と云ふものは採るに足らぬものである、故に如何なる事柄に於ても統一と云ふことは極めて必要なことであり、さうして前にも云ふ通り統一と云ふことは有らぬる方面に特色を發揮しつゝ其根本に於て又其歸着に於て、そこに統一せらるべきものがなければならぬのであつて松は縁に花は紅と云ふ語がありすが、それが天地の間に色々に顯はれて全體として調和せられて天地間に美しい自然美と云ふものを作つて居るのであります、決して總ての草木を青くしてしまはう、總ての花を紅にしてしまはうと云ふのではない、様々の配彩があつて而かもそこに調和が保たれて美を顯はして居るのであります、道德の問題に於ても矢張り其通りて父子の間には孝養の道德が行はれ

て行き、君臣の間には忠愛の道德が行はれて行き、同胞の間には博愛の道德が行はれて行き、天地の間には至誠とか敬虔とか信仰とか云ふ道德が行はれて行く、さうしてそれが各々特色を發揮しつゝ其全體としてそこに道德の一の纏りがなければならぬ、然るに忠と孝とが衝突するとか或は博愛の主義と忠孝の理が衝突すると云ふ風に國家の道義が根本に於て統一を闕くるときに於ては、各々美しいものでありながら遂に其國を危うし其社會を毒するやうなことになるのである、他の側から云へば軍人は軍人としての本領を發揮し政治家は政治家としての本分を確守して、さうして、其全體が天壤無窮の皇運を扶翼すると云ふ更に大なる道德の下に統一せられて居るのである、軍人が政治家となり政治家が軍人となつてそこに融合を計るのではない、各其方面を異にして特色を發揮しつゝ全體が統一されて居るのである。

その如くに敬神の觀念でも尊王の忠節でも孝養の心でも博愛の心でも總てが「一誠」と云ふが「至高善」

と云ふ大いなる道念の下に統一せられて、それが發しては各々美しき道德を顯はして行くのである、それを互に衝突するが如く考へて一誠と云ふものが總ての道德を包容することを知らず、皇運を扶翼すると云ふことに於て國民總ての行動が統一せらるゝことを知らないと云ふ場合には、そこに不健全なる分子が在るのである。

そこで國家の形の上の於ての制度組織を完成して統一せらしむることについて、維新以來總ての設備が行はれたのは誠に明白なることであります、所が一面に此國民思想の方面に於て、精神界の方面に於ての調和統一と云ふことについては、其民心の向ふ處に聊か疑を起す點がないとは云へない、大體に於ては極まつて居るやうであるけれども、有らぬる世界的思潮が我國に襲うて来る上に於て十分の調和統一を得て居らぬ事が出来て居る、よし此國家は形の上の於て制度から完成統一されて居つても國民思想の意義として不健全に流れ統一を闕くと云ふことがあると、其結果は實に恐

しいことになつて来るのである。

其實例としては羅馬の隆盛であつた時には國の形に屬する法律政治と云ふものは實に完成して居つて、今日から見ても羅馬の制度は羨ましいと云はれる程なる立派なものである、けれども國が段々榮え行くに依つて色々の人民を自分の版圖内に包容することになつた時に夫れ等の人民の思想が様々に違つて居つたのを敢て氣に留めず又色々の文明が羅馬の國に輻輳し來つて希臘の思想も基督教の思想も様々なる思想が顯はれて來たけれども、それに向つて敢て統一を試みる考がなかつたのである、立派な法律が行はれ政治が施されたから、斯う云ふ國家の形、體制があれば、如何なる思想が顯はれやうともさう云ふ事は自由に任せ勝手に許して置けば宜いと云ふ風に考へて居つたのである、遂に此思想の方面から人心に動搖を來たして羅馬の國は思想界からして滅亡してしまつたのであります、又近くは支那の状態について見ましても、國家の體制上より見て不整頓の點があるのは無論であります。

ども、今日如何なる方法を以てしても殆ど人心を攪擾し難いやうの有様になつて居るのは矢張り支那の國民思想に於て統一を圖いて居ると云ふことが何よりも嘆かましい點ではあるまいか、如何なる明君賢相が出ても今のやうに國民思想が紛亂して居つたならば、これを攪擾することは殆ど不可能であらうと思はれる、若し支那の政治が前々より禪讓放伐の風でなく取つて代つて政治を施すと云ふことがなかつたならば、又若し政治が變つても國民思想が道念なり信仰の上に確固たるものが立つて居つたならば、支那は決して今のやうな浮薄の状態には居るまいと思はれます。

我國に於きましても維新の大業を成就したのは其根本は思想界の研究進歩からであり、各々勤王の士が集まつて思想界の研究か一致して遂に形の上に維新を實現して居るのであります、其反對の有様を考へて見ると思想界の問題と云ふものに動搖を來たすときは、それがどう云ふ結果を顯はして來るか云ふに眞に恐るべきものである「六箱」の中に云つてある言葉に

て是は正しいものであるとか邪であるとか云ふことをば、はつきり極め込むことの出來ないものである、何事でも推し究めて考へると判斷を下すことが出來ない點がある、随つて我々の行ひと云ふものは、はつきり指導せらるる所の標的と云ふものを失つてしまふものであるから仕方がない、ただ我々は習慣に任かせてやり來つた法式だけをやらうと云ふやうなことを考へて居ることである、其やつて居る仕事は習慣を逐うて居るから大した間違はないが根本の確信と云ふものを失つて居る、それが段々進んで新しい懷疑の思想になつて來ると、何事も判斷が下せないものである、はつきりした斷定を下すと云ふことは間違ひであると云ふことを以て主義とするやうになるのである、斷定を下すことが出來ないと云ふのが主義となつて居るのであるから、自分が行動することは假し習慣に任かせるなり若くは自分の一時の感情に依て或は自然の性慾に依て行つたら宜いのであると云ふやうになる、最も甚しいものは自分の氣の向いたやうに、性慾の刺戟する儘に

衆疑無一定國。衆惑無治民。疑定惑還國乃可安。

と云ふことがありますが、國民の心に疑が起り惑が起つたならば其國を定め民を治むることが出來ない、第一に國民の精神から疑を去り惑を除いてやつて、而して後に國家と云ふものは十分に健全なる發達を遂ぐることが出來るのである、此「衆疑」とか「衆惑」と云ふとは非常に大事の問題であつて、今日の言葉で云へば懷疑の病が國民の精神を侵して來ることが非常に恐しいことである、個人として自分の心に疑の心と云ふものがあり、道徳の問題でも宗教の問題でも若くは我建國に對する理想でも信念でも自分自身がやつて居る事柄に於ても、疑と云ふものがあるけれども、仕方がないからやつて行くと云ふやうな具合に、ただ習慣に依つて動くとか、宇宙の利害に依つて動いて居り、根本の理想信念が疑の雲に包れて居ると云ふ時には最も恐るべきものである、此「懷疑」と云ふとは古い時から色々の禍をして居るものであります、其意味はどう云ふことになるかと云へば、我々の認識に於

やつて行かうと云ふことを言ふやうになる、最初の疑は消極的の弊害であるが遂には積極的の弊害を起し、垂賢の教を嘲けり、立派な道を信ぜず、そんなものはい、加減のものであると云ふやうな具合になつてそれから様々の惡風潮が起つて來るのである。

然るに他の方面には之を助くる思想がある、科學の知識に依りて總てのものを見ても科學の知識では分らないことがある、例へば宇宙の本體にしても、神の實在にしても、亦自分の生命にしても、少し深遠の問題は科學の知識で分らない、それを「不可知」と謂ひ、知れない事を彼は心配したり又はそれに従ふのは愚である、と云ふ風に打切つてしまつて、深遠なる理想を嘲けるやうになり、そこで世の中の範圍を「可知」と「不可知」とに分けて、我々は知り得る範圍だけに働けば宜いと云ふやうな不可知論者が出て、深遠の事は分らないと云ひ、其分らないと云ふ意味に於て非常に悪い性質を含んで來る、即ち懷疑の心を助くるやうのことに働いて來る、さうして人心を腐亂せしめて行くので

ありませす、此場合に深遠なる哲學なり宗教なり古聖賢の道と云ふものは此「不可知」と云ふ事に對して決して懷疑の精神を有つてない、懷疑の反對に不可知にして敬虔の心渴仰の心至誠の心をさしげさせて行くこと云ふ爲めに深遠なる哲學の道理、宗教の教理、古聖賢の道が存して居るのである、大抵の人は知れない事はやらんで宜いと云つて、こゝで打切る爲めに懷疑心が起つて来る、佛教の語では此「不可知」と云ふことをもつと能く説明して「深秘」と云ふ語を用ひて居る、「深秘」と云ふことは「不可知」と云ふ意味と違つてそれに渴仰の精神をさしげ、そこに穆々たる道德の意味があると云ふ敬意を拂つて認めて行くと云ふのが深秘の意味であります、其間をはつきり可知と不可知との二つに打切つてあるのではなくして、此不可知の方は眼がとゞかないのであつて、門は閉ぢてないのであるが幽玄にして見渡すことが出来ない、如何にも深遠穆々たるものである、例を引いて云へば「國を肇ムル」ト宏遠ニ徳ヲ立ツルコト深厚ナリ」と云ふ此「宏遠」

「深厚」はそこに深秘の意味がこもつて来るのでありませす、宏遠、深厚の奥は分らないから、そんな分らない事はどうでも宜いと云ふ風に打切つてしまふ精神と渴仰の精神を以て見て行つて依つて、こゝに人心が輕薄に流るゝと人心が敦厚になると分れて来るのでありませす、故に佛教では分らないと云ふ意味についても「深秘」と云ふ語を用ひて居る、「深秘」とか「深遠」と云ふ語は蓋かしてあるのではないので、其底が深いから、探つて見ても容易に其意味が分らないことである、又此反對に云へば「秘閉」と云ふ語を使ひませす、是は蓋をして物を隠して置くことと例へば自分の手に不具の處があつて指が一本足らぬやうな時に手裏で隠すと云ふやうに悪い事を隠して置く意味の語であります、然るにさうでなく少しも隠しもせず閉ぢもせぬがその奥深い意味が分らないと云ふことがある、是は今日の時代精神に於て思想の混亂を來たす根源である、所がそんな事はどうでも宜い、宇宙の「不可知界」「可知界」の分限とか、建國の理想とか、道德の本源

とか云ふ深遠の意味は、どうでも宜いと云ふので、こゝで斥けもせぬば斷定も下さないで、ぼんやりやつて居ると云ふ風に、段々渴仰とか信念と云ふことに遠かり、それが爲め大切なる人間の勇氣と云ふものが奪はれて来る、「信仰は力なり、疑は力を奪ふものなり」と云ふことがあるが、疑は人間の向上する力を奪つてしまふものである、故に疑と云ふことは腹の底に隠れて居るときは善いか悪いか分らないから不道德とは見えぬけれども、此疑が一切の罪惡を醸す根元となつてしまふ、佛陀は疑を以て罪惡の最も甚しいものであると云つて居る、よく考へると儒教の精神も我惟神の道も矢張りさうなつて居ると思ふ、たゞ佛陀がはつきりさう云つて居るのであつて、さう云ふ語を搜せば澤山あると思ふのですが、此深遠なる御國體の根元に對しても若くは哲學宗教の秘密に就ても國民は健實なる確信を有つて居らねばならぬ、水戸の學者會澤正志の新論中に論じて居ることによい事がありませす

新論——兵法曰無恃、其不來、恃吾有、以待之、無恃、其不攻、恃吾有、上所不、可攻也、然則使吾治化、治來風俗淳美、上下守、義民富兵足、雖強寇大敵、應之無遺算、則可也

と云ふことがある、是もあなた方が専門に御研究になつて居る事柄であります、國家は他より攻めて來ないであらうと云ふやうな空ら恃みのことをして居るではならぬ、何時でも他より攻むることの出來ないだけの實力を養つて置かなければならぬ、兵備の上では其の如くであるが、思想界に於ても其通りで、何れ思想問題は其中にどうかなるであらうと云ふやうな空ら恃みの事は宜しくない

國民の思想と云ふものは、はつきり確立せしめ元氣を充實せしめて、如何なる主義が起つて思想界を侵し來らうとも、それに動搖せられず、攻むべからざる所があるやうに國民思想を鍛へ上げて置かなければならぬ、さうして上下義を守り民富み兵足ると云ふやうにならねばならぬ、此富と義と兵と云ふ三者が揃つて居つたならば如何なる場合にも如何なる大敵を引受けて



も決して恐るゝに足らぬと云ふことを論じて居るのでありませす……かやうの事は諸君に申上ぐるのは釋迦に説法のやうなことでありませすが、私は新論を讀んでこゝに到り非常に感じたのでありませして、此上下義を守ることに、民富むと云ふことと兵足ると云ふことは何れも思想界の問題と離るることの出来ぬものであらうと思ふ、義を守ると云ふことは無論道義信仰の問題であるし、民富むと云ふことも、たゞ民が金持ちになつたのみでは何にもならぬ、假令如何に大金持がありても、經濟と道徳と云ふ觀念が伴うて行かんれば何にもならぬ、國民個々が富んで居つても國家を危うした例は幾らも在るのであるから、民富むと云ふことについて道徳の意義が含まれて居らなければならぬ、又兵足ると云ふことについては兵の量のみが多くとも其の内容即ち兵の質が悪かつたならば何にもならぬ、御勅諭の精神に基いて益々軍人氣質を立派なものにし一誠と云ふ事を本にして鍛へ上げて行かなければならぬ、先帝陛下の勅語によりませす「億兆心ヲ一ニシテ世世厥美ヲ濟ス」と云ふことについては思想の問題を十分明かにしなければならぬので、心を一にすると云

ふことは表面から國民には皆忠愛の觀念が伴うて居ると申せば心配は無いやうであるが、今日は多數の國民中には個人思想であるとか拜金思想であるとか、極く卑近の現實思想の爲めに我國の美風を失ひ若くは失はれても、それに對して、疑を懐いて居る者が段々ある、それをどこからでも説き破つて如何なる思想の上に居る者も皆同じやうに億兆一心の所に基かせて行かなければならぬ、さうするにはどうしても思想の調整統一を考へなければならぬのである、たゞ國民道徳は一方に陣取つて居り、宗教思想は宗教思想で陣取つて居り、又經濟の側では金持は金を儲ける一方に陣取つて居り、軍人はただ軍人として武を磨くことばかりやつて居ると云ふ風で思想の根本に於て統一と云ふことを訣いて居つたならば、政令は一途に行はれ、國民全體は一の御皇室の下に統一せられて居つても、思想信念が鈍つて居る爲め其力は減じられてしまふ、商業家であらうが他の實業家であらうが、思想の上に確乎たる信念を以て統一せられて居つたならば、それが何よりも國の強い本である、さうするにはどうしても思想を調整統一しなければならぬのでありませす



### 宗教家の活動を促がす

法學博士 添田壽一

我國は王政維新以來、總ての文物が破壊せられたと云ふことは諸君の御承知の通りである、其の破壊せられたる結果、精神界は丸て混亂状態に陥つたと云ふことも諸君御承知の通りである、今や其の混亂状態の弊をお互が造りつゝあると云ふことも、諸君が既に御熱知のことである、果して然らば此の混亂状態を如何に纏めるか、如何に收拾するかと云ふことは、お互に之を慎重に考へなければならぬ問題であるのみならず、此の後益々此の物質的文明が外から侵入して今や我國は精神界の混亂に加ふるに、物質的偏見と云ふもの非常に沈溺いたして、殆ど我國の將來如何と云ふ問題

を喚起さんとしつゝあると云ふことは、お互胸に手を當て、考へれば、疑を容れざる問題であると考へる、今や我國は滔々として唯一時的の表面的の極く不眞面目なる不熱心なる唯過激な極端なる花火的の言論事物に心酔いたして、冷靜に親切に根本的に國家社會の將來を考へて居る人が甚だ乏しきを憂ふるのである、私が申すまでもなく人間と云ふものは有形的食物ばかりで生きて居るものでない、即ち無形的食物と云ふものを同時に十分に攝取しなければ完成したる人類として立つことが出来ぬと云ふことは、是も私が申すまでもありませぬ、總て有形的食物と云ふものは、先づ

誰も饑しい時には食へますから誰も受けますけれども此の精神的無形的の食物に至つては、維新以來總ての舊思想舊事物が排斥せられたる其の缺陷を充すことの注意を怠つたのである、それ故に今日に於けるが如き精神状態を來し、所謂無形の精神的の危険を帯びたる赤痢實扶の里の病毒と云ふ如きものにも互に冒されて居るのである、それで此の食物は所謂有形でない、有形的の苦痛を與へさせぬからして餘り意とせず居りますけれども、それが即ち漸々及んで我國家社會の將來をして心配に堪へざらしむるのである、今日各種の社會の弊害、社會の弊風、人心の動く所甚だ堅實を缺くなどと云ふのは皆此の精神的食物の不足に由つて來たるものである、是實にお互が今や大いに考へなければならぬ時機でないかと心得る、親切に國家社會の將來を思ふ者は、是等の點に付き深く思をいたすべき時機ではないか、斯の如きことは徒らに騒いで居る人の耳に這入りませぬけれども、一事一物表面の事に追はれて居る人の耳に這入りませぬけれども、苟くも慎重

に己一身の將來、國家社會の將來を考へたならば之實に重大なる問題でなからうかと思ふ、そこで是は或は倫理學、哲學等の如きに依つて幾分か供給されませうけれども、全體の國民にはもう少し所謂共同的の食物を要する、即ち日常の腹にも適する所の無形的の食物を要する、即ち茲に於てか宗教と云ふものゝ必要が起るのである、宗教は即ち一般國民に對して必要な所の精神的食物を與へる所以であるから、今や宗教家が大きい此の方面に向つて活動せんければならぬ時機である、然るに我國の舊來の宗教家は果して如何、御熱心であるかも知れませぬけれども、我國多數の國民が要する所の食物を十分に與へて下されつゝあるや否や、是私が大いに惑うて居る點である、或は今まで我國民が食物を受けないからしてどうも與へる譯に行かぬと仰せらるかも知れぬけれども、受けざると雖尙ほ與へるのが宗教家の任である、唯望む者に向つてのみ與へると云ふことならば、餘り宗教家の功勞を大切にする必要はありませぬ、即ち迷つて居る者、陥つ

て居る者、墮落して居る者、少くとも食物を拒絶する者に向つて、殊に其の勢力を集中せられんければならぬ、恰も醫者が苦い藥は病人が服まないけれども、服まないからと云つて棄て、置いては、醫者たる者の責任を全く盡したるものと言はるべきや、服まない者は尙ほ服ませなければ、病氣は治らぬ、願くは私は我國の宗教家がもう一層、即ち基督教と云はず佛教と云はず、國民の救済に大なる勢力を注がなければ、此の多數の國民を善良なる方向に導き、此の廢れたる風俗を改良し、混亂の状態に陥つて居る所の精神界を救済すると云ふことは殆ど望がないと思ひます、故に青年諸君も此の國民の状態に鑑みて、何が故に自から奮つて宗教界に身を投ぜざるや、唯徒らに官吏になり、唯徒らに會社員になるのみが人間の能事でもなければ、國家國民の必要とする所に身を投じて行くこそ眞に國家國民に親切なる者と言ふべきである、唯徒らに流行を追うて、人の行く所のみ向つて、樂なること名譽なること、所謂有形的の虚榮心に驅られると云ふので

は、即ち國家國民に向つて親切なるものと云ふことが出來ないのである、苟くも國家社會の必要上、此所が即ち一の病氣の甚しき所であると云へば、其所に飛込んでこそ、始めて國家國民に親切なるものと言ふべきである、願くは諸君、時勢の變化、國家國民の必要と云ふことを看破せられて、進んで宗教界に身を投ぜらるゝ御方が陸續輩出せられんことを希望するのである、私は此度亞米利加に参りました、實に宗教界の御盡力の必要なることを深く感じたのである、日本を去つて、父母を去り、兄弟を去り、朋友を去り、單獨進んで北米合衆國に行く所の青年が、廣漠なる原野の間に設けられたる所の茅屋、即ち二疊敷か三疊敷位の部屋の中に、終日汗水を流して疲れて歸つて來て、單身其所に獨座して、所謂四邊を眺めても一の朋友なく、語るべき人もない状況に其の青年が居つたならば、其の青年の心中果して如何、之に對して宗教の慰安なくんば、勢ひ所謂物質的快樂を求むることには

向ふと云ふことは、是は免れないのである、茲に於て  
 か支那博奕なり、或は飲食店に出入するとか、其の他  
 言ふべからざる過失に滔々として陥ると云ふことは是  
 は一般人としては實に止むを得ざることである、斯の  
 如き状態に同胞を置きながら、唯徒らに其の爲す所を  
 攻撃した所が、それは攻撃する理由はあるけれども、  
 甚だ思ひ温かならざる所がある、即ちさう云ふ羽目に  
 陥るならば、當り前の人間としては動もすれば邪なる  
 道に傾むくと云ふことは、是は免れないのである、之  
 れを責むるよりは之れに向つて適當なる慰安を與へ、  
 之れに向つて代るべき所の、即ち宗教に依つて精神的  
 食物を與へ、或は高尚なる、有益なる會合、集會、書  
 籍或は娛樂、其の他の代るべき機關を之に供給して而  
 かも尙ほ墮落するならば、茲に於てか鼓を鳴して責め  
 て可なり、然らずして唯徒らに同胞の過失を擧げるの  
 みでは、私は親切なる方法ではないと考へます、甚だ  
 無慈悲なる事柄である、况んや今や在米同胞は大いに  
 感奮して改善の方針に向ひつゝあると云ふ際に於て、

徒らに其の非を擧げるのみが能事ではあるまいと思  
 ふ、故に一步今や改善の機運に向つて居る同胞を益々  
 獎勵し、益々誘導してさうして尙ほ足らざる所に向う  
 ては、宗教家慈善家が極力力を注いで、同胞をして  
 向上發展の途に着かしむると云ふことは、是は同胞に  
 對するの義務であり、又此の日米問題を完全に解決す  
 るの途であると確信するのである、成程在留の米國布  
 教の任に當つて居る御方が決して不熱心と申す譯では  
 ありません、けれどもそれが足りませぬ、故に諸君は  
 謂はゆる布教師となつて米國の地に於て同胞に接せら  
 れ、之に適當なる精神的の食物を與へ、慰安を與へて  
 之を善導する途に御盡し下さると云ふことになつたな  
 らば、私共が唯當り前の話をして廻るよりも、在留同  
 胞に與へる所の恩恵の大なることは殆ど比べものにな  
 らないと思ふのである、此の事は私は在留同胞の狀  
 態を見まして實に同情に堪へない次第である

(講演大要文責在記者)

研 鑽



日蓮主義本尊論

井 村 日 威

人法の關係

人は言ふまでもなく釋迦牟尼佛、法は妙法蓮華經で  
 あります、或人は妙法蓮華經を一大圓佛として人格視  
 し、之を本尊の主軸として人本尊論を主張しましたも  
 のもあるが、普通の教相には無い議論で、所謂穿鑿の  
 學の餘弊ではなからうかと思はれますが、そういふ特  
 別の議論は別問題と致しまして、今は普通の教相に依  
 つて人法を定めます、人たる釋迦牟尼佛に就ては壽量  
 開顯の久遠本佛を以て本尊の主軸とすることは異論な  
 きことでありますから多くの議論を要しませぬ、其本  
 法たる妙法蓮華經に就ては其見方が種々の方面から見  
 られて居つて議論が分かれて居るのであります、或は

此妙法は本果實証の妙法で本佛の証得の妙法であると  
 言ひ、或は本因下種の妙法であるから本佛の手にある  
 ものでなくて、上行菩薩の手に渡つたものである、  
 或は真理の極點が妙法である、或は佛の教法が妙法で  
 ある、と言ふ様な鹽梅に色々と言明致しまして、一向  
 纏つた處がない、今の日蓮門下の人に「妙法蓮華經と  
 は何ぞや」と云ふ題を出して説明させたならば、十人  
 十色で區々であつて、一向要領を得ぬ事であらうと思  
 ひます、妙法蓮華經を一本尊とする法華宗が、其有様  
 では宗風の振はぬは當然であります、天台大師が妙法  
 を解釋して「妙とは不可思議に名く法は十界十如權實  
 の法なり」と言はれました、妙法蓮華經の全体は即宇

宙全轉である、宇宙全体の關係が不可思議なるが故に妙法と云ふと申されたので、宇宙全轉が妙法とすれば其中には因法もあり、果法もあり、真理もあり、教法もあり、行法もあり、一切が含蓋せられて居るのでありますから、何れの方面から論ぜられても、それが間違であるとは申されませぬ、獨が妙法である地獄が妙法であると云ひましても處てはありませんが、然し左様な普通の説明で、人類を向上し救済すると言ふことには何等の益に立たない、縱令道理として如何様の義理が含蓋せられてあつても、我等の向上に資し解脱を助くるものでなくては信ずるに足らない、故に妙法を解釋するには、其解釋が誤てはない道理として然るべきものであつたと致しまして、現在の自分が救濟せられ、自分等を佛果に導き得るものでなくてはなりませんから、此意味に於て如何に妙法を見たならばよいかと考へて見ねばならぬのであります、天台は觀念を以て修行の方法と致しましたから、自分の心即陰妄の一念に三千の諸法を具して居て、それが三諦圓融

の妙理を具へたもの處と觀念して行くのでありますから、妙法を真理の王として、其真理を自分の心に發見すべく努力致して行つたのであります、日蓮聖人の教義は之とは違つて、吾々末代の凡夫は觀念杯と云ふことは堪ふる力がないに依つて、信仰の力を以て佛陀の慈悲に攝取せられ、信心の一行の中に萬善萬徳を攝して、釋尊の因果の大功法を受得し、成佛の大目的を成就しようとして云ふのでありますから、妙法が真理であると云ふ丈では其内容があまりに高くて、我等には直接手の届かぬものであります、然らば我等は如何に妙法華經を解すればよいかと云ふに、先に申した如く本佛釋尊が、我等衆生の爲めに與へられたる「教法」と解することが最も適當であらうと考へます、壽量品の譬説にはは好良藥と説かれてあります、此大良藥は良醫・佛に譬ふが諸の經方に依て、色香美味の藥草(天然的藥草にして真理に譬ふ)を求め、之を撻從和合(佛智に依つて真理を証し積功累徳して功德化するに譬ふ)して一大良藥と爲して、子に與へられたものが

即妙法蓮華經である、故に此妙法は釋迦如來の御手に依つて功德化せられたるものでありますから、本尊抄には「釋尊の因行果徳の二法は成く妙法蓮華經の五字に具足す」と仰せられたのであります、神力品の結要付囑の文を見ますれば、彌々明白であります、結要の文には「以要言之如來一切所有之法如來一切自在神力如來一切秘要之藏如來一切甚深之事皆於此經宣示顯説」とあります、此が妙法蓮華經の内容を法體的に説明致したので、此に如來一切と云ふ語を冠したるは壽量品の撻從和合を云ふたので、如來の御手を通したる真理切徳力用てなげねば益に立たぬことを言つたのであります、此如來の御手に依つて功德化せられたる一切を此經に於て宣示顯説した、此經即ち妙法蓮華經の五字に結束して、末法受持の要法として顯示せられたのが此結要付囑の文であります、此四句の文は左の如く結束せらるゝのであります

- (名)如來一切所有之法(妙法蓮華の妙名)(總)
- (用)如來一切自在神力(斷疑生信の力用)
- (體)如來一切秘要之藏(實相真如の經體)
- (宗)如來一切甚深之事(佛因佛果の宗要)

所説の法體  
所含の功徳

(教)皆於此經宣示顯説……(能説の教法  
神力品十神力の中の第七空響聲の文に「説三大乘經名妙法蓮華經菩薩法佛所護念二汝等當深心隨喜」とあります、此も正しく妙法を教法(教菩薩法)として、其教法に深心隨喜すべきを示したのであります、又全品の偈文に能持是經者と繰返し、應受持斯經と説かれたるのも是經即妙法蓮華經を教法として説き、其教法を受持し隨喜すべき事を示されたのであります、斯經を見て参りますのが、上行、所傳の五重玄の妙法蓮華經であります、然るに此意味を忘れて述化天台の解釋に同じて、眞理王として觀念の對境なりと認めたる妙法のを解釋以て、本化の妙法を解せんと致しますから、譯の分らぬ妙法が出来るのであります、日蓮聖人は以上の意味を更に一の譬諭を以て御示しに相成つて居ります、即ち母と乳との譬でありませぬ

法蓮抄内十五(遺文一一五八)  
此佛の御功德をば法華經を信ずる人にゆづり給ふ、例せば悲母の食物の乳となりて赤子を養ふが如し、

教主釋尊は此功德を法華經の文字となして一切衆生の口になめさせ給ふ赤子の水火を辨へず毒と藥とを知らざれども乳を含めば生命をつなぐが如し云云  
 母は佛陀に譬ふ、佛の積切累徳を妙法五字に結束せられたるを、食物の消化して乳汁と爲つて出づるに譬へられたので、食物は母の体内に於て消化せられずば、幼兒を營養することは出来ないと同じく、如來の御手を通さざる其理は、吾人幼稚の爲めには營養にはならない、此場合に於て母と乳とを分離して、乳は入用なれども母は不用なりと論ずるものありとすれば其愚や及ふべからず、母を離して乳を求むるあらば、猿を離して肝を求むるが如きものであります、人法の關係も此通りであります、妙法を信するが故に釋尊を嫌ふものありとせば、母を離して乳を求めんとする愚者にはあらざるか、解剖學者をして母体を論じ、乳汁を論ぜしむれば、各別様の解説を爲さんも、事實は之を別離し得べきものにあらざるが如く、佛を論じ法を論ずる場合は、各別に其解釋を爲し得んも、吾人信行の上

に於て佛と法とを分離して、之を意圖することは出来るものではないのであります、以上論じましたる處に依つて人法の關係は御分りの事と存じますが、要するに佛の慈悲が我人に被るには妙法蓮華經の五字を通して來り、吾人の信仰を捧ぐるには妙法蓮華經の五字を通して佛陀の願海に至ることを得るので、妙法蓮華經を通してなれば、佛陀と吾人の意志疏通を計れぬのでありますから、妙法蓮華經の五字は佛陀と吾人の中介者として最も吾人には大切なるものであります、故に本尊の中央に最大文字を以て顯されたものと考へます、それと同時に妙法を信するものが本佛釋尊を忘れては、妙法蓮華經を信する意味を爲さぬのでありますから、母を殺して乳を求めんとする様な愚擧に陥らぬ様に願ひたいのであります、吾師日生法華經講義第七卷一八六に人法の關係に就て論述せられてありますから左に抜用致します、熟讀せられなば人法の關係は瞭然たること、信じます  
 人法の關係 及實體的に之を論ずれば全く一體の佛

界縁起の法門なりと雖ども化他の上に教法として現れ又吾人が行法上に信念の意識を定むるには不二而二の上にて本佛三輪の妙化より來る聲色爲經の妙法を以て信念の接觸點となし感應の源泉は本佛釋尊の大慈願海にして、此願海より發する妙法たることを信念すべく、恰も悲母と乳房と乳汁と赤子と生育との關係の如し、法界の妙理は佛陀の大智に接せらるること母の健全なる胃中に食物の消化せらるると同じく本佛世尊の妙智願中に擠從せられ終りてこゝに赤子は悲母の手に抱かれ而して東西不辨の赤子は只この乳房に頼りて乳汁を飲む時自然にその身を生育するが如し、斯の如く母と乳とは分離すべからず又優劣を校ぶべき要なし、母なくして乳あることなく、母は乳なくして子を養ふものにあらず、赤子は乳房を愛して母を打つことあり、彼は餘りに幼稚なり、少しく思慮を有するに至らば母の恩を思はざる子あることなし、若母に依りて乳は無用なりと云はば最早其者は幼稚の域にあらず、蓋し未代の信行は如何に智解を増進するとも成佛の行門に於ては觀解なきこと幼稚の如し、聖判に未代幼稚の頭に懸さし

ひと言へり、誰かこの幼稚の域を出づるものあらんや、上人自ら理即に秀て名字に足らぬと云ふ、若し我を觀解を有す幼稚にあらずと云ふ人あらば、是潛せるなり、亦慢せるなり、質直意柔軟の誠言誰か思さらんや  
 上來辯明し來りました處を以て、先に引用致しました祖判中に、妙法蓮華經を本尊とせよ、釋尊を本尊とせよと申された處に引合せて見ますれば、其祖意の在る處は御了解が出來様と存じます、妙法を本尊とせよと云ふも、釋尊を本尊とせよと云ふも、其意味は妙法と釋尊とを別々に意識して申されて居るのは無く、釋尊と云へば當然妙法が具し、妙法と云へば釋尊が其本主であることは含ましてあるものであります、母と云へば乳は其母の中に具はれるもの、乳と云へば母体を通して來るものとは言はずして明了なるが如くでありませ、故に祖判は一應矛盾あるかの如く見えて居りませりとも決して矛盾致しては居らぬのであります、矛盾せりと見るのは見方の悪いのであります、以上述べました理義によりて、本尊論の大体を御了解になりませる機切望致します

勢大

# 宗教と時代の趨勢

法學博士 阪谷芳耶

私は幕府の末に生れ、政治と教育とを以て世を送つて居るものでありますが、宗教上の感化を受けて居るものである、それで私が如何様に感化を受けて居るかは當時の状況を申し述べたなら、其半面を見るに都合が宜いと思ふ

現代の日本の政治家學者一般國民の宗教的觀念は、確かに一變せんとして居る、物の一變せんとするには必ず反動がある、今日は宗教家の態度を慎重にせねばならぬ時である、既に宗教的觀念に於て、政治家學者の思想が一變せんとする趨勢であるから、之に處して行く用意を忘れてはならぬ、幕末の時は、我邦は純平たる宗教國であつた、神社佛閣は上御一人より下一般の人に至るまで尊崇致しました、即ち政治の重大なる

詔勅には、宗教の言葉が伴ふて居つたのであります、私の家は日蓮宗でありましたから祖先は深く信じたものであります、然るに維新の當時私共青年の時には、佛敎は國を滅すものであると云ふので、漢學の隆盛時代でありました、佛骨表などは誦んじて居つた位で、深い意味は分らぬがたゞ佛敎は嫌だと云ふのであつた、私の父は漢學者でありましたが、漢籍であれば何でも讀むと云ふやうな譯で、萬卷の書を讀破すると云ふ態度で、聖書の漢譯が出来た時之を買取ることは面倒であつたが、漸く手に入れて之を讀まれた、それを窺かに私も讀んだと云ふ位で、私が宗教家になり得ない譯である、また神社佛閣が如何に感化を與へたかと云へば、神社は恐いものと思ふておそろしい處に行くと云ふ觀念であつた、また佛閣に對しては、當時愚なる浪人共が増上寺を焼いた、さらに淺草の觀音堂をも焼かんとしたが之は防ぐことを得た、そう云ふ状態で宗教の感化は人心より遠かつて居つた、其後文部省が設けられて開成學校が建てられた、私共は開成學校で英國

米國の書籍を讀まされた、其處で將來政治を取るべき青年を教へた、開成學校は知名の士を出して居るが或教師が耶穌敎者であつたと云ふ事、或る生徒が黑板に落書して、「身は是れ堂々神州ノ民、何ノ向テ大羊一論ニ皇道」と云ふ様な有様で、教育と宗教との關係は全然離れて居つたのである、其後學者は教育と宗教とを分離せしめて來たのであるが、二十三年に勅語が發布せられて教育の方針を示された、勅語の中には宗教を加味した言葉は表はれて居らない、即ち當時國民道德の問題には宗教家に依頼する考がなかつたので、ソツトして隅の方へ片付けて置くと云ふのであつた、然るに近年世道人心を維持することは、教育の力のみでは出來ぬと云ふ事になつて來たのであります、我邦が五十年間宗教を輕視したのであるが、健全なる思想を養ふには政治と教育のみではいかぬと云ふ事を自覺して來たのである

この宗教大會なども深い意味はなからうが、世の趨勢と云ふべきものである、必ずや世の缺乏を補さねば

ならぬと云ふことになつて、この會も開かれたのであらう、本年行政整理によりて宗教局が所管換に爲つたのは、誠に簡單な事ではあるが、心理状態を面かせしめて或缺陥を補はねばならぬと云ふ世の趨勢であると思ふ、一面から見れば教育家が兜を脱いたとも云へるどちらにしても自然の勢である、宗教大會は斯くして催されたもので、神が集めたとも云へよう、或は佛が集めたとも云へよう、而して現在及將來に於て、政治教育に如何なる方法を以て進むべきか、大に議論の存する所であるが、要するに斯かる會合は偶然でない又諸君の催されたる大會でもない、確かに一世の趨勢が集まつたものと思ふのであります

(十一月五日宗教大會に於ける演説の大要也、記者隨筆に大要を記したるもの、文責業より記者に在り、白碧庄)



## 佛教各宗派管長招待會に 於ける見聞記

(白碧生)

行政整理の關係から、多年内務省所管の宗教局が、文部省に移ることになつたので、奥田文相は各宗教團體の代表者を招いて、十一月二日小石川植物園に懇親の宴を開かれた、會するもの五十餘名、正午食堂は開かれて精進料理の晝餐會が終つてから、奥田文相は左の挨拶を試みられた

諸君、御承知の通り本年六月官制改正の結果、宗教局は内務省の所管より文部省の所管に移され、宗教に關する事務は小官之が管理の任に當ることゝなれり、就ては御挨拶を致し又御意見も拜聴致したしと存じ御招待申上げたるに、斯く打揃うて御來臨を得たるは小官の光榮と存じ且満足する所なり、宗教局

ことあるべし、此等のことは勿論其他宗教行政上のことに關し、各位に於て御高見もあらば充分に拜聴したきは當局の切に希望するところなり、而して今日各位と此席に於て會見することを得たるを機會に茲に一言氣づきたる點を述べて各位の御一考を煩はさんとす、各教派の教師は布教傳道の任に當り直接に世人教化の責に任ずるものなり、従つて相當の學を備へ一般世人に比して學力一頭地を抜くものあらざるべからず、今や國家教育の機關も頗る發達整頓し、世間一般の智識の程度も往年に比して數層の進歩を見るの時機に際したるを以て、各派教師は此際充分にその學識を錬磨し、以つて世運の進歩に魁するの覺悟あるを要すへきは論ずるまでもなし、故に各派において教師の檢定條規を定むるに當りては宜く此點に留意せられ教師補任を慎み、從來往々にして見たりし弊に陥らざらんことを努むべきは勿論、現に教師たる者にして學識不充分なるものあるに於いては、努めてそれが學殖を涵養せしむるの路を講

の所管を文部省に移したるに就ては、世間種々なる揣摩臆測をなす者あれど、別に深く理由の存したるにあらず、元來宗教は信仰を基とするものなれば、教育とは其本來の性質を異にす、而かも依て世人を教化し世道人心を扶持する作用に至つては、宗教は教育と表裏相俟ちて缺くべからざるものなると同時に、宗教教育に關することは從來文部省の所管なりしを以て、旁々之を一省の下に管理するの至つて自然にして且つ便宜に適したるを認めたるに依る、従つて今回の改正に依りて敢て行政上大体の方針を變更するが如きことなし、然れども漸次必要に應じて法規の整理或は事務の取扱上に多少の變更を要する

じ、以つて國家の進歩に貢獻するの計を立てらるる機致したきものなり、次に教派の教師にはその性格操行の優良にして凡人を超絶し公德能力人の師表たるに足るものなるを要すべきは又論ずるまでもなし然るに現今教師中に往々にして如何はしき人物も有之ることを耳にす、若し果して事實ならんか、之がためにその教派の面目を汚損するのみならず一般宗教家の品位を傷け、延いて被害を社會に流布すること頗る大なるものなり、故に各派において教師を補任するに當りては前にも述べたる如く、嚴にその選叙を慎み單にその學識如何を檢するに止まらず、合せてその徳性の如何に留意せられんことを希望すると同時に、現に教師たるものゝ不適當と認めらるるものあらば毫も假借するところなく之れを淘汰するの舉に出でられんことを欲す、近時宗教界における紛擾を耳にするは愈々多きを加ふるが如し、斯くの如きは宗教界の恥辱なるは勿論、延いて害を社會に流布し累を行政に及ぼすこと決して少しとせず、各

位はよく其部下を戒しめ自家の本分に省み奮勵勉勵以て國民の思想を健全に導き、國家永遠の幸福を計るに貢献するの覺悟あらしめ、濫りに紛擾内訌を醸成するが如きことなき様努められんことを切望す、又感化救済の事業は宗教家の當に留意してこれに従事することを怠らざるは實に喜ぶところなり、而かも是等の事業は物質的文明の進歩と共に、益々其必要を感ずるに至るの狀況なるは各位の御承知の通りなり、各位は出來得る限り部内の教師をして是等事業に従事せしめ、且つ各位自らその事業の成績に留意せられ、以て之れが普及を期せられんことを望む目下當局においても是等事業を經營施設する各教宗派よりその事業の狀況につき報告を徴するの道を開かんことを欲しこれが調査中に屬せり

と述べ、不二天台宗管長は一同を代表して謝意的挨拶を爲し、本多日生師は昨年の三教者招待と異なるなきやを質し、更に左の趣意の意見を述べられた

▲宗教と施政との關係に就ての意見——各教宗派の信

正路に導くは、特に宗教家の任務ならずんばならず、各教宗派の管長者は意を用へて其部下をして此意を轉し、宗教信念の大本と國体擁護の道德との契合を明かにせしめ、進んで世道人心の救済に力を致さしむべし、然れども宗教家は如何にこの方針に力を致すも、政府の施政にして宗教の信念を無視し或は之を排斥する等の事あらば、人心の歸嚮を亂だし國民の幸福を害すること亦少なしとせず、此を以て政府に切望する所は宗教の感化力を尊重して、施政と宗教家の行動との間に適當の聯絡を保つに留意あらんこと是なり

▲教育の方針に關する意見——教育に宗教を混同の宗教の異同を學校に容るべからざるは明白なる事なり、然れども從來政府の教育方針を見るに、此混入の弊を防ぐに鋭意なるの餘り、學校教育に依りて人間固有の宗教性を無視し、信念の萌芽を毀損し、宗教を人心より排斥するが如き措置を取り、教育者をして自ら宗教的信念なき人たらしめたるの嫌あるのみならず、延びて一般人心の上に於ける宗教の感化をも妨ぐるの事態

仰主義には各々其基く所あり其歴史あり、皆各其特色を發揮して民心の教化其他社會の救済に従ふべきは勿論の義なり、然りと雖其大本の目的が着實不動の信仰を與へて人心を感化し、人生に大安樂を與ふるに存するは又明白なる事實なり、且つや新舊内外何れの宗派を問はず、此國民を教化する上に於ては、皇室の聖德仁慈を奉戴して其尊嚴を中心としたる國体を擁護し、其基本の上に國民の信念と道德とを教導すべきは、宗教が國家に對する本義として均しく力を盡すべき大本なりとす、國体の擁護と宗教信仰の根本主義とは其歸一にして二者の聯絡密接なるに従て、國民感化の實効益々完きを得べし、特に近年社會体制の變遷と思想道德の混亂と相待つて人心の動搖惑亂を來たし、信念道德等一切の權威を無視せんとする傾向を生じ、其極國家の組織に對してすら反抗破壊の態度を執る者を生ずるの不幸に際會す、此等の危險なる思想に對しては上下舉て志を協せ、之が防遏に力を致すべきは勿論なるも、思想の根底より人心を匡正して信念によりて人を

を生じたり、其結果德育の事は往々にして理論に馳せ形式に偏し、人をして現實實利の方面を偏重する傾向を生ぜしめ、從つて衷情より權威に服従する精神を失ひ、又人の至情に基きたる和樂恩徳の生活に遠ざからしめたり、權威に悦服するの心、感恩謝徳の情、報本反始の誠は人生道德の基礎にして又國家成立の大本なり、而して此等心情の徳は宗教的感化と密接して離るべからざる關係を有し、宗教は宗派教義の異同を問はず、皆この至誠の靈性を養ふを目的とする者なり、然るに教育が宗教的感化を疎外したるの結果は、社會の變遷思想の混亂と相合して德風名教の廢頽を致し、現實主義自然主義乃至は破壞思想の勢力を助長せしめたるは事實争ふべくもあらず、此の如きは人心感化の上に於ける國家の大損失にして、世道名教の上に於ける深憂と謂はざる可らず、宗教家は今日人心の混亂を救ひ社會の思潮を指導する上に於て、宗教本來の精神を發揮して教育の効果を妨ぐるが如き迷信を誡め、宗教の信仰と國民道德との調和を期し、又社會の健全な



る發達に資する爲に宗教家の自覺を新たにし、各々斯に全力を注ぐべきは勿論なるも、此事たる又一方學校其他の教育と相扶け相補はざれば十分の成功を期し難し、從來政府施政の教育方針は此點に於て遺憾なき能はず、一方宗教家は自ら戒飭し奮勵して國家の爲に人心感化の事に盡すと共に、政府も亦教育社會をして宗教的感化の忽にすべからざるを熟知せしめ、學校教育に於ても宗教性を尊重し信仰の萌芽を愛護するの方針を立て、教育と宗教とが各々領域を明かにして、其本來の天職を盡すと共に、相依り相扶けて社會人心の爲に、又國家の安寧の爲に努力し得べき方策を講ぜられんことを要望する所なり

以上佛教徒多年の宿論懸案を述べ來りて、佛教徒の抱負と自覺を披瀝せられたので、一座肅として聲なく何れも傾聴して居つた、這般の意見はいまや天下の公論にして識者の夙に絶叫する所、世道人心の指導に於ては宗教感化力の偉大なるを認めざるものはない、佛教徒自身の覺醒は國運の發展に大なる關係があるので、

社

## 罪囚に對する改善政策

千葉監獄教諭 秋葉日慶

三十七八年の戦役を経て一躍一等國の伍班に列せる吾國に於て、尙六萬有餘の罪囚を見る、是れ豈日本文明の一大缺陷にあらずや、況んや國民租税の誅求に泣き、財政整理の急迫を告ぐるの時に際し、大約七百萬圓の國費を監獄行政にのみ投ずるに於てをや、彼等可憐の同胞がその自由を拘束せられ、日夜悶々として鐵窓の下に吟呻せる悲惨の光景に接しては、苟も一掬同情の涙ある者、人道擁護の大義に鑑み、瞬時も忽緒に附すべけんや、されど如何なる國家如何なる時勢に於ても、罪囚の絶滅は到底期すべからざる所、唯其處遇の方法機宜に適せんか、稍々理想に近き改過遷善も決して絶望の業にあらざる也

抑も罪囚の改善は恰も國手の病者に對するが如く必ずや先づ其罪質及犯由を糺明し、之に適應せる方術を

こぞつて斯かる思想上の問題に一致の歩調を取らねばならぬ、唯だ徒らに教團敵視の小感情に囚はれて、思想歸一の問題を一蹴し去るが如きは、佛教徒の態度としては敬服が出来ない事であると思つた、次で弘津説三師が制度上の改定に就て希望演説があつた、奥田文相は内閣會議があると云ふので歸られたから、何れも精進料理の土産をさげて歸途に就いたのが午後三時半であつた、

各宗管長の中には三十歳阿後の青年も居つたが、六十歳を超へたものが多い、應接溜所に在ること二時間半、一人として宗教界のために風發の氣焰を擧げて思想問題を語るものは無かつた、沈着て眞面目な態度ではあつたが、發洩たる意氣を具へて居るものは少ない様に直感した、何だか其風采が主義定見より離れ去つて妥協に日を送るもの、如くに見えた、吾人の心理觀察が或は正しくないかも知れぬが、僅かに自己現在の教團を固守し擴張せんとする位の考へて、新時代の機運に處して宗教の精華を發揮せんとするの氣概あるを見うけなかつた、さても將來に於ける佛教の權威はどうかなるのであらうか

施すの要あり、而して之が處遇の方法に於て特種的に行ふべき獨居拘禁の感化法と、一般多數を收容すべき雜居制度の二種あり、現在の狀態に於ては不本意なれど後者によりて比較的完全なる方法を講ぜざるべからず、統計の示す所に依れば彼等の多くは窃盜、強盜、詐欺横領、賭博等専ら利慾に關する罪其七八分を占め而も累犯者の數は全囚の半ばを越ゆるの現狀を示せり且つ其犯由の近因に於て怠惰究迫等諸種の事情纏綿せるものありと雖も、其基本的遠因を追遡して仔細に之を検覈すれば、殆んど十中八九は酒色及賭博に耽溺せるの結果ならざるは無し、果して然らば吾人が感化の主力を傾注すべきは、斯る酒色及び賭博に惑溺せる多數の累犯者にして、之れが處遇の方法も亦多種多様なりと雖も、其第一要件として峻嚴なる制裁を以て其遵守を強制し、刑法の威嚴を保持すれば、彼等が性癖を矯正する唯一の武器なり「汝の子に職業を教へずんば盜賊を教ゆるものなり」との猶太の一村夫子の放言が眞理ならば、適當なる作業を選擇し指導宜しきを得べ

くば、之即ち無言の活法にして不知不識の間に勤励力行の美風を馴致せしむ、是第二の要件也、身体の健全が品性に及ぼす影響の多きことは夙に醫學上の定論也、而して一般健康状態の劣等なる罪囚に對して衛生上の設備を完全にするは是れ第三の要件也、以上の異なる處遇をして聯絡統一を據梅し自在に運轉活動せしむるの機關を要するは蓋し自明の理數なり、然れども斯の如きは抑も從也、百尺竿頭一步を進めて改善の本義たる人格の完成を期せんと欲せば、唯夫れ教誨教育の指導に俟たざるべからず、尠くとも教誨的意匠を主として戒護檢束等の施設を全ふせざるべからず、何となれば精神思想は本體也、言語動作は形影也、如何に高壓威嚴を以て言動に制肘を加ふるも、病弱犯者に於て一時の鎮靜は其効を奏せんも、思想の根底に自覺を與へずんば、到底健全なる改悛の實を見ること能はざる也、然るに現行監獄制に於て教誨教育を以て第三位若しくは第四位に置くが如き觀あるは吾人の頗る遺憾とする所也、然れども吾人希望を徹底せんと欲せば

現今人物經濟の上にて不可能の事情あるにあらざる無さか、之を要するに教誨の第一要件たる徳育は強者の人格の力能く弱者の人格に影響指導するにあり、されば教誨の主腦たる教誨師が温健なる學識を具備するは勿論、崇高なる人格を鍛練するの要あり、のみならず一般司獄官吏に於ても特に此意義を體認し、日常深く人格の修養に留意するの必要あり、唯徒に俸給に依つて勞力を致すが如き浮薄なる態度を以て其成績を望むが如きは百年河清を待つ類のみ、而して監獄教誨に於て教導の主力を傾注すべきは、將來尙矯正の餘地ある年齢三十才に至る累犯者にして、而も酒色に原因するもの也、而して彼等が茲に至れる精神缺陷は亦千態萬狀なりと雖も、之を結束し來れば實に左の二三に包容する事を得べし、曰く自重的心操及報恩的觀念の缺乏並に猜疑心の充塞是れ也、今斯る病癥を矯正するに當りては先づ人生の眞價を自覺せしめ、獨立自營の精神を鼓舞し、進んで吾人の家族的及び社會的地位に關する明晰なる思想を注入し、更に吾國建國の理

想たる世界統一の天業養正導民の御事業に對しては、之を補翼し奉るべき一大責務を、二千五百年來綿々として吾人の祖先より繼承せるものなることを周知せしめ、敢然として國民的反省を促進せしむるにあり、之に加ふるに飲酒の激毒を示して凡百の罪惡此一凶より生ずることを生理經濟道德宗教等各方面より極説するは最も焦眉の問題なりと信ず、而して現代の如き思想上の過渡期に際しては、人心の歸嚮する所なく、漂々然として宗教信念の動搖最も烈しく、動もすれば迷信盲信の慘害甚しきものあり、而も他面に於ては科學の進歩は長足の發達を遂げ、從つて理性の要求は著しき豹變を來せり、斯る時代思潮に對しては從來の舊佛敎徒が最善の城廓と頼める教權的信仰を以て其信念を強ゆること能はず、尠くとも合理的哲學的基礎を有する健全なる宗教客體を確立し、散漫蕪雜何等の根據なき群小神佛の地位を明晰にするの要あり、然るに此要求に満足を與へ、簡明にして効績最も著明なるものは、實に釋迦牟尼佛の健存と祖先崇拜の精神及形式

を鼓吹するにあり、祖先崇拜は實に東洋倫理の根底にして、一國風敎の源泉也、力行的修養の捷徑也、孝道の至極也、由來儒敎の學說としては忠孝一致の思想なきにあらざるも、眞に現實の上に於て忠孝一本の大道を濶歩し、君民同祖の精華を發揮せるものは、獨り光彩璨然たる帝國の質實にあらずや、特に祖先崇拜の基礎觀念を爲すべき實在の意識は、儒敎思想を一轉して高遠なる佛敎哲學の大思想と渾然融合して、茲に健實なる一大徳敎を建設せり、然るに西歐文物の急激的輸入に因り、最近五十年の物質文明に心醉し、敢果なくも東洋生粹の醇厚なる徳敎は、徒に漢々たる妖雲の鎖す所となれり、豈憚して亦慨せざるへけんや、進莫祖先崇拜の旗幟を翻し教育勸語の聖旨を奉戴し君民同祖の大義に則り島帝國の天職を叫び、國民的反省を促し、而して自我の觀念を喚起せしめ、報恩道徳を主張せば如何なる妖魔も寂然として其跡を潜めん也、夫れ斯の如く教誨的意匠の下に於いて始めて戒護檢束も作業の督勵も、衛生設備も、整理統一せられ秩然とし

て一絲亂れず着々處遇を誤らずんば、改善の曙光期して俟つべき也、されど病膏盲に入れる絶対改善不能の罪囚に對しては、之を北海道若しくは小笠原島に移送し牧畜或は編織の業に従事せしめ自然の風光に娛ましむるは蓋し相互の至幸ならんか

思ふに累犯者第一回の犯罪は未成年の時代にあるもの約四割を占む、若し夫れ刑罰責任を問はざる時代の罪過及び微罪不檢舉に終れる行爲を嚴密に調査せば、殆ど九分九厘迄は已に少年時代に於て必ず犯行を敢てせるものとの推論は、決して失當の見解にあらず、是英佛の先進國に於て不良少年等の感化救濟事業に多大の勞力と經費を拂ひ、設備の完全に達せるより吾國の在監人に比して約半數にも至らざる所以也、叙上の如き犯罪の個人的原因は完全なる感化法に依りて矯正し得べきも、其社會的原因に至つては文明の進度に従ひ愈犯罪を累重するの惡傾向を生じ都市の病的膨張や、貧富の懸隔等幾多不健全なる社會狀態は直ちに犯罪の誘發的衝動にあらざるなし、茲に於てか社會政

策上諸般の畫策は當然起らざるべからざるの機運に際會せり、史を編て救濟事業隆替の跡を一瞥し來れば施藥救療等斯業の中心は常に仁慈にあらせらるゝ御皇室に存在せり、殊に畏くも明治天皇の曠古無比なる維新の大政を成就し給へる不世出の徹明を以て夙に仁慈を臣子に垂れ給ひ、屢々多大の内努を割き恩賜惠植の責に充てさせらるゝが如き、眞に萬邦に比類なき國家の一大美點也、然るに是等感化救濟事業が未だ吾國官民の間に重大視せられざるは誠に照代の不祥事にして國民の猛省を要する所也、約言せば監獄行刑は一時的也濶縫也、首尾一貫前後照應して根本的改善の實を擧げ國家忠良の臣民を造らんと欲せば、一に健全なる一國の風教を確立し、穩健なる社會政策の實行に期待せざるべからず、是吾國刻下の急務にあらざるや



蘭室訪問の記

白碧生

訪川島辯護士

麹町區役所の向側に巍然たる三階建の洋館がある、それが辯護士川島仞司君の事務所である、扉を開けて玄關に入ると婦人客の下駄があつた、名刺を元氣よい書生に渡して面會を求めた、客がありますので御待ち下さればと云ふので、二階應接室に案内をうけて待つこと半時間、書棚には書籍が一寸の隙間もなく積まれてある、法律書の中には元祿快樂錄や偉人の跡二宮尊徳とか浪六の日蓮などが見へて居つた、それから階下應接室の書棚にも文藝政治社會其他の書籍が積まれてあつたが、玄關の入口に近い書棚には「統一」雜誌が來訪者の目を惹くやうに揃へてあつたのは、何とも言へぬ快感を覺えた、予は二三の雜誌を讀んで居

ると、ナアドウアこちらへと次の應接室へ案内をうけた、簡單な挨拶に次で、予は日蓮主義に關する所見を叩いたが、氏は徐ろに語りて云ふやう俗務に従事して居るので、頭が錯雜して居るから秩序ある意見とてもありません、いづれ何か書いて見せしよ、而し近來念寫と云ふことが、心理學的に証明し得らるゝ様になつたが、之は靈界の問題であつて、宗教上には念力と云ふことがあるので、之を事實に認め得らるゝことではなからうか、昔は怪事として居つた問題ではあるが、物質以上の力が物質に加はると云ふ事實は否定することは出來得まいとおもはる、這う云ふ事はあり得べきことと信じられる、芝に自分の友人の葬儀があつた時に、其行列を寫真に撮つた處が、その持つて居つた白木の位牌の上に、死亡者の肖像が

表はれたことがあつた、之などは會葬者の大多數が死亡者の靈に對して、滿腔の愁嘆と熱烈なる追慕との念力が加はつて、さうなつたのではなからうか、觀音經の中に刀尋段々壞と云ふ文がありましたが、あゝ云ふ事はあり得ると思はる、日蓮上人の龍の口法難の時、刀が三段に折れたと云ふのも、大偉人の念力の上より見れば少しも怪事ではないと考へられる、宗教の信仰は神秘的で即ち念力であるから、物質以上の力がこの物質に加はると云ふことは信じ得られるので、念力と云ふことも念寫と云ふことも同じ思想ではあるまいかかゝる問題は權利とか請求とか俗事に忙殺されて居つては、容易に眞理をにぎることを得ないが、心靈界に從事して居る人は、之等の問題に適當なる解決を試みて欲しい

と氏が莊重なる辯を以て述べ來つた時、訴訟事件の打合せに辯護士の來訪があつたので、正業を邪魔しては訪問道德に背くものありと心付いたので、さらに宗教上に關する執筆を約して暇を告げた

### 訪 矢 野 檢 事

十月二十八日夕刻であつた、矢野氏より一通の書狀が予の許に届いた、封を押し切つて見ると、天長の佳節には聖壽の無窮に至禱し祝盃を舉ぐべき今上第一次の祝日なるを以て、夕刻より來るべき旨の案内狀であつた、けれどもたゞ夕刻とあるのみで日時がない、まゝよ三十一日の天長節に同達はなからうと合點し、別に問合せもせて三十一日の午後四時、小石川雜司ヶ谷矢野茂君の邸を訪ふた、氏は既に宮中より歸邸せられて大禮服は床柱にかけられ、豊明殿にての下賜品は御眞影の御前に供へられてあつた、磊落洒脫なる氏は大に語り大に飲み、ことに世道人心の啓發に就ては深く注意を拂はれて居るので、高邁なる識見より視たる宗教観は、吾人の内省に憤するのみならず、亦教育家全体に對する頂門の一針たるものがある、其談話の一節を記さう

▲現在の宗教徒は我儘なものが多く、自己の運動の歴

史を作らないで、過去の佛教徒が働いて効績を挙げたことのみを誇りとし、世の中が優待せぬの冷遇するのと騒いで待遇論を八ヶ間敷言つて居るが、それは制度に於て改むべき點は改むるのも良いけれども、罪を制度に歸して人心感化を怠つてはならぬと考へる、かくして徒らに時日を送り思想問題に思ひを致さぬのは、常識があるであらうかどうか、思想問題に關係するものは尤も完全な常識を持つて居らなければならぬ、自分には解らないが、今の教界の人々は此の常識を缺いて居るものはないのであらうか、常識を缺いて居ると自覺が起らない、そうなると天職を果たすことが出来ない、従て他のものが正義の運動をして居ると、人生に迂遠な問題の如く冷評して敢て顧みる所がない、かう云ふものがある、誠に困りたものだ、之ではならぬ、どうしても日蓮上人の仰せられた我日本の柱とならんと云ふ様な堅實な信念自覺がなければいかぬ、自分の思想の中心をこの信念自覺に置たならば、公平に物事を見ることが出来る、今の時勢は大に日蓮主義を

絶叫して國民の自覺を喚び起してやらねばならぬと考へる、自分はこの思想問題に働いて見ようと思懸けて居るのでありますが、思ふ様にはかどらない、而し日蓮主義者は一時の成功を望むものでないから、撓まずに働かましよう

と語り終つて慨然たるものがあつた、氏は理論の人でない、熱實なる道念を實際に躬行する信仰家である、信仰によりて鍛練せられたる其人格はいかにも崇高である、而して平民的で少しも飾らない風采が表はれて居る、其家庭に在りては家族と共に讀經唱題の修行にはげみ、外には國家風教の問題に全力を瀆がる、あゝ人はいかゝる風格を養ひたいものだ、



# 活動史

東京

日蓮主義は理論に没頭するものではない貫頭貫尾積極的活動の態度を取るものである。いかに講壇に妙談の花を咲かせても一片熱烈の道念なくんばそれは人心感化の上には何等の効果の見るべきものがない、近來の日蓮主義は講壇上の問題として徒らに絶叫するに止まるものなきにはあらざるなきか吾人は深く省みて警むる所なるも稍やその傾向あるを見る之等は即ち日蓮主義の意氣がないからで未だ徹底せざる談道者流に過ぎない吾人は之等に對して折伏の鐵鎚を加へねばならぬ吾人の運動の急務即ちそこに存する

▲十月十二日午後二時日曜講演、三上義徹師は吾人の生活的活動に意義を與ふるものは宗教の信仰に存する所以を説き聖祖の一代は悲

劇の幕に閉されたりしも思想生活は常に光明に充ちたりし活歴史を語り井村日成師は日蓮主義の本尊に對する古來の學見を評破し常住三寶の本義を説いて信仰の依止處を明かにせられたので迷信の傾向ありしものも純善の信仰を喚起するものがあつた

▲十六日妙教婦人會の講演を開いた開田權僧正の聖祖に訓練せられた女性の信仰状態を懇説し本多大僧正は家庭和樂の中心は信仰の熱情より來るものにして道德上の善行も皆この基礎に立つべき所以を教示せられ婦人の胸に深き刺戟を與ふるものがあつた

▲十九日午後二時日曜講演、秋葉純一師は信仰の對象は完備せる理義と力とを有すべき所以より人法不二の本尊を示し井村日成師は本尊論の謬見を叱正して統一的本尊に皈命すべきを教へられた從來日宗教團に於ける本尊は聖祖の身命を賭して光顯せられたる正脈を失ひ徒らに混雜せる對象によりて信

仰の意義を失はしめたのであつた之等は極力排斥を加へて正統に導かねばならぬ

▲廿五日午後七時東洋大學橘香會講演會を開いた六名の講師が熱誠を捧げて研鑽と信仰とを披瀝せられたのは將來宣教の戰士として何となく愉快に感ずるもあつた殊に各教團の青年が互に戰闘の準備に力を致すは日蓮主義發展の上に慶祝すべきことである

▲二十六日午後二時日曜講演、熊井本光師は美裝して道を論ずるも世に多く其本質を叩けば國家民生の特性を亡ぼすものなりとて一切の宗教を批判し管川權僧正は無價の寶は信仰によりて獲得すべしとの理義を説き明かして至誠渴仰の信念を喚び多大の感化を與へられた

▲本化記者團——十一月一日午後一時より講演會を統一閣に開いた三上白碧生の開會に次て高鍋統一評論記者の佛教に於ける人格中心論の懇説があつた兒島村雲婦人紀

者は人は寝て食ふのみでなく同情の念あるを要する所以を説き其人たるの價直を明かにし宮田布教記者は聖祖會式の精神を史的に論じ來りて感恩報謝の道義を教へ加藤日宗新報記者は吾人の心的生活が強固なるや否や自身の心靈に同みて反省修養すべきことを示されたさらに活宗教社の講演豫定なりしも時既に六點を報じたれば閉會を告げた此日の講演は各記者の所見立場が違つて居るだけに内容の豊富に加ふるに天地を動かさんほどの熱誠がこもつて居るを見うけた講演後例月の法螺會を上野忍川に開いた何がさて飲む食うわさらにあらずだ會するもの活宗教社日宗新報社布教社及び統一の同人六名であつた

▲二日午後二時日曜講演、木村義明師は妙の意義を分解して蘇生てう説明を試み人間復活の靈力は妙力に存する旨を説き三上義徹師は日蓮主義に對する世人の考察より

説き起して統一開顯の要義を論ずること二時間に及び多大の靈感を與ふるものがあつた

▲三日午後七時より淺草永住町思恩教林の講演を開き今成師の法話あり餘興などありて盛會なりしと▲城南品川方面にては毎月十數回の公開及家庭講話ありて盛んに宗教信念を鼓吹しつゝありと云ふ

十月十七日午後七時吉

東海道 津村唯一の信者として知られたる佐原伊平氏宅に出張講演を開く聴衆青年學校教員等約百名にして最初青年幹部柴田佐原小池氏等の講演あり次て加藤師は責任の自覺は職務精勵の基礎なるを説き野中師は聖訓を引いて信根の確立を論じ林少尉は祭の心得より延て其尊嚴なるべき所以を明し更に吉田布教師は天地の公道と題し個人も國家も此公道に則るべきを論明し大に聴衆の志氣を鼓舞策勵するものあつて午後十一時閉會を告げしと云ふ

十月十九二十日野田村法華寺に於

て替む十九日午前御寶前に於て西山僧都大導師の下に嚴肅なる一大法要を修し大衆一同の參拜あり午後一時講演を開く此日聽衆二百野中師は佛陀の慈悲と題し生佛の關係より延て佛陀の大慈父母の子に於けるが如しと結び吉田師は勇猛精進異体同心親近善友等の聖語を引て其服膺を催し夜は更に八時より講演を開き西山師の開會の辭に次ぎ野中氏は統一主義を論じ前田師は本尊論と題し散漫なる諸佛は遂に久遠の本佛に歸趣統一せらるべきを明し吉田氏は道と題し權威慈愛並び行はるゝもの即道にして個人も社會も國家も共に之に則るべきを論じ高橋僧都は信後の生活と題し上人の法悅的生活より延て信後の妙味を明し午後十一時閉會翌二十日午後一時より再講演を開く吉田師は大なる哉信仰の力と題し其不思議力用を説き高橋師は妙法蓮華經と題し此五字七字が有ゆる諸形式に卓越せる所以を論明して多大の法益を與へ午後四時閉會

更に寺庭に於て投餅供養ありて中々盛會なりしといふ

福井

十月十三日の聯合布教會を南居妙正寺に開く此日宗祖聖人御會式にて聽衆堂に充ち甚だ盛會なりき石橋會章師は信仰の心得に就て朝會一乘師は聖祖御法難に就て各熱誠の辯を以て聽衆に多大の感動を與へしめた十八日山内本行寺に開催朝會師は本會の趣旨を懇説し次て石橋師は父子の感應に就て増田師は法定より國清さんと題し朝會師は佛教の本質と題し各熱心に日蓮主義を發揮せられたり聽衆法悦に滿て信仰を増さしめた因みに記す本行寺住職朝會師は赴任已來同時に舊來より御講と稱して毎月七日十二日と兩度集會したるを顯正會顯本婦人會と改稱し毎回聖語を講義しつゝありと云ふ

十月十三日福井市妙經寺に於て宗祖日蓮聖人御會式を執行す増田聖道師は參詣人一同と實前に修法夫より教法上に就き説教ありて聽衆

の心田を潤せり廿一日能仁權僧正高木隨行員は晝夜に亘りて妙經寺に講演を開催し増田聖道師は開會を宣し高木本順師は身讀法華の意義を明かにし能仁師は歴史上に現はれたる日蓮主義者の活生命を傳へ夜間も亦開講法定より國清さんと題して増田聖道師之を述べ日蓮上人の身讀主義に就て高木本順師の廣長舌あり能仁師は現代の要求せる宗教に對して懇説詳論する所あり多數の聽衆は日蓮主義の光明に照されて心の暗を除かれたりと云ふ

金澤

天晴會金澤支部にては十月十七日午後一時始坂本長寺に於て創立一周年紀念講演會を開催せり先常務委員御園慎一郎氏開會の辭を述べ柴野順吾氏は一周年紀念の辭を朗讀し後會員初島松二氏は一周年紀念に對する一場の所感を述べ内藤日朝師は「天晴會の地位」と題して天晴會の思想上に於ける大使命を闡明し次に能仁僧正の隨員高木師は「國民

の覺醒」と題し我が國民は日蓮主義の健全なる思想を養成して奮闘努力し以て國運の發展に力を致さるべからずと説き能仁事一僧正は墨昭玄師の紹介にて「三教諸現の偉人」と題し日蓮上人が排他主義城廓主義の偏狹なる態度に出でず大包容主義を以て佛教は勿論儒教神教の三教を認現したる世界の偉人なりし所以を該博なる引證と得意の雄辯とを以て縱横に論斷し斯の大偉人を小さく見たる日本人は非常の大損害なり吾人は宜しく敬虔の態度を以て斯の偉人の主義人格を贊仰し以て國民大精神の發揮に努めざるべからずと論結し聽衆に多大の感動を與へ終つて各會員は講師と共に懇親會を開催したるが席上各會員交々所感を披瀝するあり池田絃翁氏の薩摩琵琶「本能寺」の彈奏等ありて是れ亦た非常の盛況を呈し天晴會の萬歳を合唱して和氣霽々裡に散會したるは同十時過なりしと云ふ

大阪

十月十二日午後七時より生玉前町堂閣寺に於て日蓮主義講演會を開催せり驚田顯正師は「佛教の淺深」能仁一十師は「二十億萬圓を如何にすべきか」高木治地師は「法を知りて國を愛せよ」梶木日種師は「宗教の本尊」に就て各自熱心に講演されたり

▲日蓮主義講演會は爾來大阪の地に種々の障魔の爲め日蓮主義宣傳の機運に至らざりしが過般高木師當市に卦任さるゝありて此事を憂慮し何事を差置さても對外布教の寸時も等閑にすべきものに非ずと成し當地強信の佛子石村堅四郎君の多大の外護と相俟て去る四月より毎月例會を開催せられたりある事は既に報道せし如くなるが達成寺住職梶木日種師も如何て此れを目過すべき愈々同師主權の下に毎月例會を開催する事となりたり誠に爲法爲國喜ぶべき現象と云ふべし十月十三日發會式を兼ねての講演會を中寺町蓮成寺に於て午後七時より開會せり辯士及び演題は驚

田顯正師「心鏡を研磨せよ」能仁一十師「肉に死して靈に活きよ」梶木日種師「佛教の眞價」にて各々辯を振はる聽衆多く熱心に聽講せり主義宣傳の下種未だ日淺さも何れの時かに花を開き更に結實の功果を得らる事疑無し

田顯正師

心鏡を研磨せよ」能仁一十師「肉に死して靈に活きよ」梶木日種師「佛教の眞價」にて各々辯を振はる聽衆多く熱心に聽講せり主義宣傳の下種未だ日淺さも何れの時かに花を開き更に結實の功果を得らる事疑無し

▲顯本婦人會十月廿二日午後二時より堂閣寺に開く能仁一十師は「家庭に於ける婦人の地位と修養」川崎英照師は「佛法人を救ひ又人を亂す」に就て各々平易に世間の實例に信仰談を交へての講演ありたり

▲監督布教師能仁事一僧正は十月二十九日夜茨木在耳原法華寺に於て巡教を爲し十月三十一日天長節祝日午後一時より大阪西高津中寺町蓮成寺に於て公開演説あり會衆百餘名

開會の辭 梶木日種師 國民の宗教的自覺 高木本順師 昔の信仰と今の信仰 能仁僧正 十一月一日午後一時より探市櫛屋町妙滿寺にて開會

の覺醒」と題し我が國民は日蓮主義の健全なる思想を養成して奮闘努力し以て國運の發展に力を致さるべからずと説き能仁事一僧正は墨昭玄師の紹介にて「三教諸現の偉人」と題し日蓮上人が排他主義城廓主義の偏狹なる態度に出でず大包容主義を以て佛教は勿論儒教神教の三教を認現したる世界の偉人なりし所以を該博なる引證と得意の雄辯とを以て縱横に論斷し斯の大偉人を小さく見たる日本人は非常の大損害なり吾人は宜しく敬虔の態度を以て斯の偉人の主義人格を贊仰し以て國民大精神の發揮に努めざるべからずと論結し聽衆に多大の感動を與へ終つて各會員は講師と共に懇親會を開催したるが席上各會員交々所感を披瀝するあり池田絃翁氏の薩摩琵琶「本能寺」の彈奏等ありて是れ亦た非常の盛況を呈し天晴會の萬歳を合唱して和氣霽々裡に散會したるは同十時過なりしと云ふ

開會の辭 川崎英照 佛教の眞價 梶木日種 日蓮主義の本領 能仁玉正 十一月二日午後七時大阪生僧寺町堂閣寺にて開會聽衆百餘名

開會の辭

▲天氣晴朗にして波高し川崎英照國民道徳に就て 梶木日種排他性と包容性の信仰能仁僧正閉會の辭 高木本順 斯の如く大阪宗教界も我日蓮主義の靈光の輝くありて人心新たなるものありと云ふ

岡山

關西の雄將能仁事一師の精力的活動は天下已に認むる所にして岡山の天地爲に生氣あるを覺ゆるものあり加ふるに中川事顯師帝大文科の業を卒へて雜誌日蓮に一管の筆を走らして氣焔を擧げ亦講演に立つて雄大な抱負を披瀝して日蓮主義の宣傳に努む而して時代の趨勢と心靈の通ふ所は遂に日蓮鑽仰天晴會を設立するに至れり岡山に於ける一流の思想家翕然として之に贊し十一

月七日岡山市會議事堂に於て發表大講演會を開くに至り海軍演習の爲出張したる海軍少將佐藤鐵太郎君を聘して渴せる思想界に日蓮主義的靈水を灑かれたりと云ふ爲道可慶限り也

廣島

小權執迹の徒多き土地柄に於て拆伏の利劍を振ふことは容易の事でない然れども日蓮の遺訓を奉ずるものは其數少なしと雖何條消極卑屈の振舞ありてならうぞや自己の力の及ばん限り力奮奮闘の血の歴史を貽すべきてある十月十一日より三日間松川町の妙詠寺に會式講演を開いた島田溝口大橋師等は身心懈倦の道念に安住して信仰の啓蒙に努め十五日天晴會の例會を本照寺に催し窪田利兵衛氏開會の辭を述べ溝口會起師は活力ある佛教の本義を明かにし廣島縣教師永井貫一師は四個の國難と題して時代の弊風を叱し日蓮主義の徳教に因るべきを論じ大橋權僧正は上人の一代が奮闘活動の好模範なりと稱揚して示同

九州

徳教正信會 十月四日午後七時より久留米本泰寺に於て男子部例會を開く新開木村橋本諸氏の所説を演べし後古賀仁三郎が獨特の快辯を以て孝子傳を述べ次に中原師起つて一人は何事を爲すべきか一懸案を提出し人性の二面を説き生佛の關係

を論じ活ける信仰の意義を示して人事の娯趣を教へられ午後十一時閉會された

▲顯本講 兩筑顯本の信徒は例月中原師を招聘して講話を聞くのが何よりの樂みとして居る十月十三日田中氏宅にて午後八時より「受持に就て」其一其二の二座約三時間に亘る長廣舌に大に感動するものがあつた

▲龍口御法難會 十月十一日(舊九月十二日)の夜於本泰寺報恩會を開き午後八時より説教二座會するもの満堂中原師は聖人御降誕より五十歳に至らせらる迄の事蹟を簡單に述べ次に龍口御難に就て約二時間の轉法輪は能く六百年前の昔を偲ばせるものがあつた夜を徹し唱題修行の信徒數十名

▲十月十八日 徳教正信會婦人部を午後七時より本泰寺内に開く平岡師の信仰談中原師の佛教と婦人の修養古賀氏の講話能く會員を指導啓發するものがあつた

▲十月廿日 渡瀬新興寺に於て

中原師は隨喜參聽者に對し晝は信仰の要義晚は將來の宗教出海師は信仰と生活の意義を説き能く信徒の心田を潤すものがあつた

千葉

七里法華の靈域荒れたりと云ふも未だ人心の奥底には燃ゆるが如き信仰がある然れども我國現代の思潮の混亂はこの靈域にも浸漸して精神界の統一を缺き享樂者の多きを加ふるに至りたので無限の光明を照されざれば永久に活くべき機會を得るこが出來ないこの欲求を充たさん

望むが如く至る處大啓況にて等しく法雨に潤ひ心田の佛芽復活の曙光を見るに至つたと云ふ此機會に於て異体同心の祖訓を服膺し不退止まざれば現代思潮の混亂を統一する根本原動力となるであらう今其場所及演題を左に掲ぐ

同廿七日東金町西福寺に開會 本多大僧正 森川布教師 萩原布教師 寺院存在の意義今成監督布教師 日蓮上人の主張と氣魄 本多大僧正 同廿八日片貝村本隆寺に開會 成島布教師 萩原布教師 戒定惠の三學 萩原布教師 唱題の功德 今成監督布教師 法華經より見たる佛教 本多大僧正

# 教學財團基金申込報告

(第四十七回)

## △特別會員

東京市牛込區原町八成寺住職  
一金六拾圓也 田井 日晃  
右ハ兼ニ貳百圓也申込ノ處更ニ右記金額ヲ追  
加セラレタリ

## △維持會員

千葉縣山武郡雙成村東中  
一金五拾圓也 法道寺住職 齊藤 見玉  
右寺前住職河野見中ハ轉任ニ付前申込金額五  
圓ヲ取消タリ

# 教學財團基金受領報告

(第四十七回)

(大正二年十月廿日迄到着分)

金貳圓(完) 赤坂管文寺檀家 毛利 廣賢  
金拾圓 四谷法惠寺前住職 森本 眞良  
金參拾圓 牛込久成寺住職 田井 日晃  
金貳拾圓(完) 淺草廣印寺住職 山根 日東  
金五拾圓(完) 同 同 寺 檀家 中  
金壹圓(完) 飯沼妙善寺檀家 岩田 辰次  
金參圓(完) 京都久遠寺内 坪永 八重  
金參圓(完) 同 同 寺 野俊  
金參圓(完) 同 同 寺 三好 君江  
金拾參圓貳拾錢(完) 吉美正覺坊住 朝倉一乘

金四拾圓(二) 京都本正寺檀家 石田 香吉  
金五圓(二) 木崎大乗寺檀 露田藤吉外十名  
金五拾圓(二) 東西西福寺住職 山岡 會俊  
金拾圓 淺草寬安院住職 岡島 義興  
金貳圓五十錢 廣島本照寺檀家 藤井 義之  
金貳圓(二) 鳥取法泉寺住職 楳井 開章  
金貳拾圓(三) 同 同 寺檀家 若林 誠治  
金拾圓(皆) 淺草真言寺檀家 小林 與七  
金五圓(二) 同 同 寺檀家 萩原 兩三  
金參圓(完) 同 同 寺内 鈴木 もと  
金五圓(完) 山口縣了性院檀 富田傳四郎  
金五圓(十四) 神奈川縣大豆戸 本 乘 寺  
金五圓半(完) 千葉縣幸田本光寺 片岡 義實  
金拾五圓 東京品川本光寺 今成 日誓  
金貳百圓(完) 京都正行院檀家西村吉右衛門

## ▲千葉縣東中法道寺寺檀

金參拾五圓 住職齊藤見玉 金貳圓 林惣三  
金貳圓四十錢 總貫七三郎 今岡庄一  
金貳圓六十錢 林止次郎 金八十錢 石  
田倉次郎 五十錢 齊藤平吉 四十錢 戶  
田安四郎 石田徳次郎 今關源太郎 三拾錢  
宛 村井彌曾八 渡邊留吉 貳十錢 石田廣  
太郎

## ▲京都市成就院寺檀

金五圓 住職川崎英照 金七拾圓 富永東一  
郎 金拾五圓 荒木宗次郎 金八圓五十錢  
藤田八郎 金六圓 殿村丑之助 金五圓 藤  
野尚次郎 金壹圓 大槻九良兵衛(以上完納)

## ▲山口縣秋林寺檀

金四圓 住職吉田義孝 金貳拾圓 河村勝藏  
金拾圓 水本松二郎 金八圓宛 河村安  
之進 河村和作 河村克夫 大木安十 金六  
圓 河村拾藏 金五圓二十錢 桑島數之進  
金四圓宛 大木徳太郎 古木勝之助 山下忠  
次 貞木六松 金參圓 河村文之進 金貳圓  
桑島健藏 金壹圓六十錢 大木代吉 金八十  
錢宛 今地伊平 濱崎久太郎 五十錢 桑島  
良助 四拾錢宛 水本伊三郎 清水松二郎  
岩崎シム 大木岩吉 河村源吉 桑村和郎  
三十錢宛 藤原源二郎 松永善作 三好次良  
戶倉長藏 山下第二郎 壹圓十二錢 今地  
泰助外五名(以上完納)

## ▲廣島市妙詠寺檀家

金拾五圓(完) 高東康一 金拾圓(二) 石本伊兵  
衛 金五圓(一) 矢野直内 金參圓宛(二) 大村  
松太郎 (完) 佐々木佐市 金貳圓(二) 松田義  
雄

## ▲岡山縣草生久成寺寺檀

金貳圓(二) 住職武藤麟 金六圓 岩藤茂登造  
金參圓 岩藤榮三郎 金貳圓四十錢 曾原  
安次郎 金貳圓宛 岩藤十郎治 藤波辰次郎  
輪原初五郎 金壹圓貳拾錢 中務百太郎  
金壹圓宛 岩藤順四郎 同治太郎 同安太郎  
安東吾五郎 岩藤武八郎 南部孫太郎 輪  
原武四郎 同住三 同忠造 野上五郎半 金  
八拾錢宛 岩藤勲一郎 田中庄太郎 安光彌

## ▲神奈川縣飯田本興寺檀家

金六圓 飯島孫八 金參圓 飯島平右衛門  
三橋金太郎 保田喜助 保田剛吉 保田徳藏  
金貳圓宛 保田竹次郎 梅澤藤吉 石井庄  
太郎 持田松五郎 持田作次郎 廣田庄吉  
遠藤幸助 遠藤金藏 三橋伴藏 金壹圓六十  
錢 飯島太古 金壹圓貳錢 白井甚五兵衛  
金壹圓宛 三橋國五郎 飯島留三郎 飯島萬  
藏 小菅林吉 小菅忠左衛門 保田豐次郎  
保田市郎 保田庄三郎 三橋伊三郎 金八拾錢  
持田重郎 持田金六拾錢宛 遠藤爲松 保  
田平藏 保田庄太郎 三橋忠藏 持田豐藏  
持田龜吉 飯島平次郎 持田富吉 白井武助  
泰 甚五兵衛 金五拾錢 保田伊勢松 保  
田清藏 遠藤直次郎 小袋辰五郎 金四拾錢  
宛 持田周太郎 飯島請助 飯島彌三郎 小  
袋喜五郎 三橋榮十郎 持田六三郎 持田時  
藏 白井文三 片野林藏 美濃口吉五郎 遠  
藤源五郎 保田幸八 保田國藏 保田清太郎  
保田兵作 保田梅太郎 保田治郎作 保田惣  
次郎 小袋久藏 持田利之助 金參拾錢宛  
保田菊次郎 同虎次郎 同太四郎 同半藏  
金四圓八十錢 飯島定吉外二十六名分合計

## ▲靜岡縣北松野妙松寺檀家

金貳圓宛 天野傳作 田中秀徳 田中貞吉  
佐野龜作 小川友次郎 宇佐美千代吉 金壹  
圓宛 望月宗吉 宇佐美榮吉 同幸作 同房  
松 佐野戸三郎 田中日何 白井多作 同繁  
太郎 同百太郎 同竹次郎 小川京作 小川

## ▲京都市法光院寺檀

金拾圓 住職金光孝碩 金拾五圓宛 三宅元  
吉 三宅かね 金八圓 青山善七 金四圓  
柴田幸太郎 金貳圓宛 米田善次郎 元木は  
る

## ▲靜岡縣見付玄妙寺檀家

金貳圓宛 坂下初五郎 鈴木岩吉 山下はな  
金壹圓貳拾錢宛 加藤彌八 磯部喜作 鈴  
木運吉 近藤新六 金八拾圓宛 瀧澤文次郎  
中島庄平 溝口伊平 伊藤作重 藤澤與平  
金六拾錢宛 味田金五郎 安田義正 古谷  
賢司 金五拾錢宛 中山勇太郎 辻勝太郎  
川合七イ 金四拾錢宛 石山芳太郎 山口平  
四郎 藤澤徳太郎 山本高吉 田中徳三郎  
杉田重太郎 鈴木忠吉 鈴木伊代吉 坂口藤  
四郎 瀧澤權一郎 瀧美子主 金參拾錢宛  
森金太郎 今井真平 田中銀藏 金貳拾錢  
大場むら

## 源十 高岡由太郎 六拾錢宛 田中龜太郎

田中金作 佐野英吉 天野貞治 吉田鐵右衛  
門 沼田千代吉 宇佐美良吉 望月由太郎  
五十錢宛 深澤由太郎 吉田豐太郎 深澤源  
十 朝比奈松蔵 石川 太郎 四拾錢宛 鹽  
川久太郎 田中市松 白井治平 田中運作  
久保田子之作 同乙吉 佐野平十 田中弘一  
望月彦作 渡邊彦太郎 深澤廣吉 三十錢  
宛 蓮池福太郎 望月徳藏 深澤大郎 松  
平喜助 蓮池菊次郎 宇津美久太郎 佐野義  
太郎 佐野彦七 宇佐美佐十 吉田幸作 蓮  
池長五郎 深澤茂作 小川喜一 石川運作  
高岡幸作 高岡松次郎 木内清作 小川義太  
郎 泉月國太郎 木内郷三郎 大島鉄太郎  
田中字左衛門 金拾八圓九十壹錢也 宇佐美  
乙吉外百二十三名分合計





九月二十日發行第十九卷

日蓮 聖人 御遺文講義

(一冊定價參拾貳錢、送料不要)

文章講話體 誰れにも讀めてよく解る 總振假名附

(一冊定價貳拾貳錢、送料不要)

法華經講義

十月一日發行第二卷

發日一每 行上同月

宮殿●須彌段

前机●幢幡 大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度はれ迄とは一層勉強仕各宗の佛具一切陳列仕置候

正價 三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と明すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價目録書を作製致置候に付御入用の諸君は、郵券四錢御送附被下候は、迅速呈仕候。此の目錄を御覽あれは、寺院様方の御入果品一切の買物何程速方でも座ながら買物安價にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り安價にてき升。



佛具卸部 京都市三條 通小橋西入 本舖 三法堂藤田總次 特電話二千七百八拾三番 振替貯金番號 東京二〇七一

小賣部

同市三條 通大橋西入 三法堂佛具陳列場

大僧正 本多日生師講演

國民思想講演錄

△菊判 全一冊三百頁 △定價金參拾錢、内地郵税金四錢

現代思潮に就て ▲誠心 國家觀念に就て ▲誠心 教育と宗教 ▲兵營生活 ▲日蓮主義の梗概 ▲何を以て之に報ひん ▲崇高なる徳義心 ▲義は山岳よりも重し ▲土規 七則

本書は大正二年夏約二ヶ月に亘り第十五第七第八師團各隊及地方諸種の團體のため百數十回七萬有餘人に對する本多師の講演を輯録したるものなり

發行所 豊橋市清水町 天晴會支部

大僧正本多日生師編

橘香集

李製皮金文字八美本 金六拾錢 上製タロウ入金貳拾錢 並製金文字八金貳拾錢 郵券四錢 貳拾錢

本書は法華經の要文と日蓮上人の遺文中より警句教訓を抄録したるものにして内容に於て發心教相佛陀人身法界本尊行法得益警策の諸篇に分類して研究引文を要する場合は尤も至便にして日蓮主義鑽仰者の供ふべき珍書也今回特に施本用として並製を發行したれば至急申込されし

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ年金七拾八錢 代金の振替貯金口座東京一二一九番へ拂込マレタシ此場合ニハ送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正二年十一月十五日印刷發行 發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所 統一團 東京市淺草區北清島町十四番地

文學博士 三宅雄次郎君序  
大僧正 本多日生師著

# 法華經講義

洋裝全二冊貳千頁  
正價金四圓  
特價金參圓  
內地郵税金貳拾錢  
臺灣韓八百多迄の小包料

## 次 目

- 序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- 第一節三種教相の綱格 ●第二節十雙權實の巧釋 ●第三節六重本迹の法華經觀 ●第四節天台の法華經觀
- 第二節待絶二妙の解釋 ●第三節一念三千の妙觀 ●第五節日蓮の法華經觀 ●第六節信成佛の要道 ●第五節究竟
- 第三節合用實の活斷 ●第四節應身常住の妙義 ●第六節天台講經要義 ●第九節
- 第四節聲色爲經の眞義 ●第七節法華の科段 ●第八節天台講經要義 ●第九節
- 第五節十節當教相の眞目 ●第十節法華の科段 ●第十一節身讀法華の光顯 ●第十二節信成佛の要道 ●第五節究竟
- 第六節重玄義の妙解 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五支 ●第八節文々四釋廣
- 第七節蓮講經の要義 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五支 ●第八節文々四釋廣
- 釋の概略 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- 譯文 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- 參考 ●讀唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也  
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町  
振替東京一二一九

統一團

信念と努力  
教育と宗教

大成丸船長 小關三平  
大僧正 本多日生

人生は奮闘の舞臺也

三上義徹

盲啞白痴の救護

子爵五島盛光

經典閑話

笹川日堂

# 統一

號六十二百二第

▲宗教大會の所見  
▲ヘルシヤ灣通信

海外先宣  
驅日持上人靈蹟探檢

花木即忠